DOI 10.18995/24344710.8.69

研究ノート

南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂（５）

ールムーランからヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンまでー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Département du Gard(5)：Alentours de Remoulins et de Villeneuve-lès-Avignon.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent à l'est du département du Gard, surtout alentours de Remoulins et de Villeneuve-lès-Avignon. Ce pays correspond approximativement à l'est de l'ancien diocèse d'Uzès, et aujourd'hui au nord de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿ではガール県東部（およそ現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）の、特にユゼスの東のルムーランとその周辺地域からヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンにかけての地域に点在する中世期のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。また聖堂内にある « chapelle » は「礼拝室」とした。採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問調査できなかった聖堂には▲を記した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが、全体を通してのビブリオグラフィーは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（http://nn-provence.com）で閲覧可能である。

30. 2　ユゼス（Uzès）とその周辺（承前）

30.2.10　ヴェール=ポン=デュ=ガール／サン=ピエール礼拝堂
（Chapelle Saint-Pierre, Vers-Pont-du-Gard）

ルムーランから県道 D981 を西へ 4.5 キロのところで、北に折れて D112 を 600 メートル行くとヴェール=ポン=デュ=ガールのコミューンであるが、南に折れて« Chemin des Bégudes » と呼ばれる小径を 200 メートルほど進むと、その道沿いの開けた野原の中にサン=ピエール礼拝堂が建っている。この場所には古代からさまざまな病（肝臓病やリューマチ、腫れ物など）を癒やすとされた泉水がわき、治癒を願う人々が訪れる聖域があったとされる。また 5 世紀前半には東ローマ皇帝テオドシウス 2 世の妃で洗礼を受けてキリスト教徒となったアエリア・エウドキアの求めを受けて、時の教皇シクストゥス 3 世がこの地への巡礼を組織したとも言われる。その真偽についてはよく分からないが、しかしこの地が古くから巡礼の対象となっていたことは確かで、その伝統は 19 世紀まで続いた。聖ペトロの祝日にはヴェールの住民はこの聖人の像を村の教会から運び出し、サン=ピエール礼拝堂まで行列を行ったという。現在残るサン=ピエール礼拝堂の建設は 11 世紀末頃-12 世紀中頃とされる。かなり古びていて、壁面には亀裂が入って倒壊防止の支えが付けられ、身廊東側の屋根も落ち、保存状態は決して良いものではない。このまましかるべき修復工事が施されずに放置され続けると、近い将来倒壊して廃墟と化してしまいかねない状態である。

2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が付くというシンプルな形で、この地方の典型的なロマネスク聖堂のタイプを示している。整形された中石材が端正に積まれた西ファサードは三角形の切妻形で、中央下部に半円頭形の飾り気のない扉口があり、その上には外側に向けて大きく隅切りされた細長い半円頭形の窓が開けられている。扉口およびその上部の窓の左右には足場を組むための小穴がいくつも開けられている。切妻の上辺部にはコーニスが付けられている。身廊側壁も南北ともに中石材がきれいに積まれており、屋根のすぐ下には、四角いビエット（ビレット）が並ぶフリーズが巡らされている。また内部の横断アーチに対応する形で扶壁が付けられている。北側の側壁には開口部はないが、南側には各ベイに 1 つずつ計 2 つの細長い銃眼のような窓が開けられている（外側に向けては隅切りされていない）。また東側のベイの向かって右下に、かつて開けられていた出入口のアーチの名残が残されている。この南側の側壁は、礼拝堂が建てられている土地が傾斜していることに加えて、1907 年の洪水によって土台部分の土地がかなり失われた影響もあって、亀裂が入った側壁全体が南側へ向けて倒壊する恐れがあり、先にも触れたとおり、それを防止するための鉄製の支えが作られている（2015 年現在）。

30.2.10　Vers-Pont-du-Gard

後陣は半円形であるが、身廊部の大きさに比べて高さも幅もかなり小さい。壁面はやはり切り整えられた中石材がきっちりと積まれている。中央に細長い銃眼のような窓が開けられている（ただし今は石で埋められている）。上辺部にはコーニスおよび歯車形のフリーズが巡る。後陣のすぐ上の凱旋アーチ壁には十字形の開口部が見られる。さらにこの凱旋アーチ壁の切妻の上辺には、先にも触れた身廊部からの四角いビエットのコーニスがそのまま延長されて続いている。聖堂壁面の石積みや銃眼のような窓、後陣の上の十字形の開口部などは 11 世紀後半頃に見られるものであるが、後陣の上を巡る歯車形のフリーズなどは 12 世紀に特徴的な装飾である。

20 世紀初めまでは、身廊の東側のベイの上に方形の小さな鐘楼が立っていた。聖堂本体と同時期あるいはその少し後に作られたもので、トレスクのサン=マルタン=ドゥ=ジュサン礼拝堂［30.1.18b］や、同じトレスクのサン=ピエール=ドゥ=カストル礼拝堂［30.1.18c］に見られるものと同じタイプの鐘楼である。この鐘楼は、その後それが立っていたヴォールトとともに崩落し、現在は古いスケッチや古写真などにその姿をとどめるのみである。

礼拝堂内部は、ヴォールトが部分的に落ちてしまっていることもあって、雨ざらしで荒れ放題という印象である。瓦礫が積まれ、雑木が茂ったりしている。19 世紀後半あるいは 20 世紀初め頃に内部の壁面が漆喰で白く上塗りされたが、今はかなり剥げ落ちている。またピラストル（壁付き方形柱）や壁アーチ、窓の枠などもかつては薄い朱色に塗られていたが、それもすっかり色あせてしまっている。身廊は、半円形の横断アーチとそれを受けるピラストルによって 2 つのベイに分けられ、それぞれのベイの側壁には二重になった半円形の壁アーチが付けられている。その壁アーチの上には水平のコーニスが巡り、それを起拱点として半円筒形のヴォールトが架けられている（東側のヴォールトは崩落）。二重になった半円形の凱旋アーチを受け止めるピラストルのインポストと、それに隣接する南北の壁アーチをそれぞれ東側で受け止めるピラストルのインポストは、後陣外部の上辺を巡るフリーズと同じ形のビエットと歯車彫刻が上下に重ねられたものとなっている（それ以外の壁アーチのインポストはシンプルな形のもの）。ビエットと歯車からなるこのフリーズは、そのまま半円形の後陣の内部の壁面を巡り、その上に半ドームが架けられている。

このサン=ピエール礼拝堂から南東に約 2 キロのところに、ユネスコの世界遺産にも指定されている古代の水道橋ポン・デュ・ガールがある。ユゼスの水源からニーム（古代名ネマウスス）まで全長約 50 キロにわたって建設された水道が、ガルドン川を越えるところに紀元前 19 年に建設された。この橋の部分だけがことさら有名であるが、橋の両側の山中に今も古代水道の遺構を部分的に見ることができる。北側ではサン=ピエール礼拝堂のおよそ 800 メートル東を南北に縦断する形で遺構が残されている。この礼拝堂の建設のために、古代ローマ水道の石材が利用されたことは大いに考えられる。また V. Lassalle や P.A.Clément によると、サン=ピエールの凱旋アーチや壁アーチの一部に組み込まれた張り出しのある 2 つのクラヴォー=コンソール（claveau-console）の存在は、ポン・デュ・ガールの石積みの模倣であると言う。

Bibliographie：

Clément（1993）pp.396–397; Lassalle（1970）pp.42–44; Base Mérimée（Vers-Pont-du-Gard）.

30.2.11a　カスティヨン=デュ=ガール／旧教区教会

（Ancienne église paroissial, Castillon-du-Gard）privée

カスティヨン=デュ=ガールの集落は、ルムーランから県道 D19 と D228 で北へ約 4 キロ、ヴェール=ポン=デュ=ガールの集落からは D192 で東へ 3 キロである。古代ローマの水道橋ポン・デュ・ガールからだと直線距離にして北東へおよそ 3.5 キロにあたる。13 世紀には防御のための周壁に囲まれたカストルムとして史料に現れる（Castrum de Castellione）。1211 年、国王フィリップ 2 世（オーギュスト）は、ユゼス大聖堂（司教座聖堂）の参事会長（prévôt）をカスティヨンの領主とした。またここは、ユゼス司教区の中のルムーラン首席司祭管理区に属する小教区であった。旧教区教会は、サン=カプレの平原を見下ろす集落の高台の北西端に建っている。別名をカスティヨンの「ロマネスク礼拝堂」（La Chapelle romane）とも言う。もともとの建設は 12 世紀から 13 世紀にかけてとされるが、20 世紀に入って大幅に改築されたために、残念なことに建設当初のロマネスク的な外観は失われている。後陣部も取り壊されて、建物は学校や司祭館などに転用された。現在は個人所有の住居となっており、内部にはアクセスできない。3 ベイからなっていた身廊は、用途の転用によって仕切りなどが加えられて、やはり以前の面影はない。西端の部屋（ベイ）から方形の鐘塔に登れるようになっている。

かつて後陣があった東側には石段を登ったところに 20 世紀の扉口が開けられている。聖堂の北側にはやはり新しい建物が増築されている。唯一その古さを感じさせるのは、聖堂の建物の西端に 17 世紀に建てられた方形の鐘塔である。要塞集落カスティヨンの物見塔としての役割も果たしていたもので、一番上には、さらに小さな切妻形の鐘楼が載せられている。

30.2.11a　Castillon-du-Gard

Bibliographie：

Clément（1993）pp.274–275; *CSAF*, no.4, 1987, p.182; Germer-Durand（1868）p.50; Goiffon（1881）pp.82–83.

30.2.11b　カスティヨン=デュ=ガール／サン=カプレ礼拝堂

（Chapelle Saint-Caprais, Castillon-du-Gard）

カスティヨン=デュ=ガールの集落の北西に位置する。カスティヨンの集落の北側から県道 D228 で高台を下り、県道 D192 に入って西に 300 メートル進む。そこから斜め右（北西）に折れて細い道を 500 メートル行くか、そのままさらに 400 メートル進んだところで北に向かう細い道に折れて 300 メートル行くと、周囲をブドウ畑に囲まれて、高さのある 1 本の糸杉が寄

り添うようにして建つサン=カプレ礼拝堂に至る。それはまことに典型的な南仏の風景である。ここから 300 メートルほど北には古代末期から中世初め頃にかけてのものと思われる広いウィラが発掘されており、大きな方形の貯水プールも 2 つ見つかっている。古代末頃からこのあたりは人々の活発な生活の場であった。さらにカロリング期になると現在のサン=カプレ礼拝堂の場所に小さな聖堂（ecclesia Sancti-Caprasii）が建てられていて、896 年（または 893 年）にはプロヴァンス王ルイ 3 世（盲目王／Louis l'Aveugle）がこれをユゼス司教に譲っている。その後ここは長く巡礼が訪れる場所となった。とりわけ疾病治癒の奇跡が信じられたようで、それはあたかも盲目者・肢体不自由者・ハンセン病患者などが信仰のゆえに快癒したとする「マタイの福音書」（11 章 5）の言葉のごとくであったという。聖カプレ（カプラシウス）は、アジャンで生まれ同地の初代司教となったとされる人物で、303 年（または 3 世紀末頃）に殉教した。フランス西部のアキテーヌ地方では聖女フォワなどとともにポピュラーな聖人であるが、カスティヨン=デュ=ガールのこの礼拝堂はラングドック東部において聖カプレに捧げられた数少ない聖堂の 1 つである。

現在残るサン=カプレ礼拝堂は、896 年のものよりも時代が下り、12 世紀中頃に建てられたものである。この地域に多くあるロマネスクの礼拝堂と同じく、2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が付くというシンプルな形である。整形された中石材がきっちりと積まれた切妻形の西ファサードには、中央下部に半円頭形の簡素な扉口が開く。ただし今はそのアーチ部分にリンテルのように大きな石が組み込まれている。切妻の最上部には、外側に向けて隅切りされた半円頭形の小さな窓が開けられている（内部は方形となっている）。身廊外壁には南北ともに扶壁が 3 つずつ付けられている。北側の壁には開口部は見られないが、南側では中央の扶壁をはさんで左右両側のベイにそれぞれ小さな窓が開けられている。ただし、向かって右側（東側）のそれは銃眼のような細長い方形のもので、それに対して左側（西側）のものは、隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓である（しかしこれも内部は方形である）。この身廊南壁には、やはり中央の扶壁の両側に半円頭形の出入口がある。東側のものは埋められていてその痕跡が残るだけである。西側のものは鉄格子がはめられているが今でも出入り可能となっている。

半円形の後陣は、切妻形の凱旋アーチ壁の高さに比べてかなり低い。この近くではヴェール=ポン=デュ=ガールのサン=ピエール礼拝堂［30.2.10］のそれとよく似ている。身廊外壁とともに、この後陣部もその石組みは整形された中石材がきっちりと積まれたものとなっている。中央には外側に向けて隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。ただしこの窓は、西ファサードや身廊南壁のものと同じように、内部は方形となっている。身廊の東側のベイの上には、かつてはヴェール=ポン=デュ=ガールと同じように方形の小鐘楼が載せられていたと思われる

30.2.11b　Saint-Caprais

が、現在は失われており、その台座だけが残されている。

聖堂内部は、半円筒形のトンネル・ヴォールトに架けられた横断アーチとそれを受ける側壁のピラストルによって、身廊部が 2 つのベイに区切られている。後陣の高さが低いために、身廊のヴォールトの高さがいっそう目につく。このヴォールトは水平のコーニスの上に架けられている。身廊側壁には各ベイの南北に二重になった壁アーチが並ぶ。この壁アーチと、横断アーチ、そしてやはり二重になった後陣の凱旋アーチ（ほんのわずかに尖頭形となっている）には、それぞれ小さな張り出し部分が付いたクラヴォー=コンソール（claveau-console）がいくつもはめ込まれている。これもまた V. Lassalle が指摘するように、ポン・デュ・ガール（ここから直線距離にして約 3.5 キロ）に見られる古代建築の影響であろうか。身廊北側中央のピラストルには、石造りの説教壇が作られている。

半円形の後陣には、バラスターの並ぶ手すりで身廊と隔てられて大理石製の祭壇が置かれている。後陣はその上に架けられた半ドームの高さが身廊のヴォールトよりもかなり低く、それだけに凱旋アーチの壁は非常に大きな（上下の高さがある）ものとなっている。後陣の外側には窓があったが、内部では完全に埋められている。またこの後陣の壁面、半ドーム、凱旋アーチには、19 世紀頃に施されたと思われるフレスコ画の彩色の跡が部分的に残されている。半ドームの起拱点を巡るコーニスや、それを受ける縦のピラストルもフレスコ画である。半ドームの中央上部には、雲に囲まれて黄金に輝く鳩が描かれている。

なおカスティヨン=デュ=ガールのサン=カプレ礼拝堂は、1986 年 6 月にフランス外人部隊（第 2 歩兵連隊所属の第 3 中隊）によって修復作業が行われたという変わった歴史を持っている。

Bibliographie：
Clément（1993）p.274; Goiffon（1881）p.83; Lassalle（1970）pp.42-44; Provost, et al.（1999）pp.304-306; Base Mérimée（Chapelle Saint-Caprais）; RIP.

30.2.11c　カスティヨン=デュ=ガール／サン=クリストフ礼拝堂（Chapelle Saint-Christophe, Castillon-du-Gard）遺構

カスティヨン=デュ=ガールの集落の北の、県道 D228 と D892 の交わる所から D892 を南へ 1.2 キロ行くと小さな道が交わる五差路となるので、それを北東（斜め左後ろ）に向かう小径に入る。200 メートルほど進んだところに 1 軒の民家があるので、その北側を東に 30 メートル入るとサン=クリストフ礼拝堂の遺構に至る。もともとここには 8 世紀にまでさかのぼるプリウレ（小修道院）があったとされる。その後 12-13 世紀にはテンプル騎士団がここを所有したとも言われるが、騎士団解散後は、今度はポン=サン=テスプリにあったクリュニー修道会のサン=ピエール修道院が所有した。聖堂自体は宗教戦争期にその北側に建っていたプリウレの建物とともに破壊され、その石材はカスティヨンの住民が住居を建てるために持ち去るなどして、いっそう廃墟化が進んだ。

サン=クリストフ礼拝堂で遺構として現在残っているのは、後陣、身廊の北壁、西ファサード

の一部である。ヴォールトは身廊北壁の上部の起拱点部分以外はすべて落ちて失われている。西ファサードは北側の角部分の一番上に、かつて聖堂外壁の上部を巡っていた「出し狭間」（マシクーリ）を支える「コルボー」（コーベル／持ち送り）が 1 つだけ残されている。これはこの礼拝堂が、13-14 世紀頃に要塞化されていたことの名残である。この西ファサードのさらに西側には、中世に隣接して建てられていた住居の壁が残されている。その住居の最も古い部分は 9-11 世紀頃のものとされ、低い位置に半円形のアーチの跡が見られる。西ファサードの地面には、かつて聖堂入口であった石段が残されている。

身廊は 2 ベイからなる。ベイを分ける方形のピラストルが、外側と内側に付けられている。そのピラストルは、内部においては半円筒形のヴォールトに架けられていた横断アーチ（起拱部分のみ残る）を受け止めている。ピラストルの両側には各ベイに半円形の壁アーチが付けられている。2 つのうち西側のものは組石がかなり崩れてしまっている。しかしながら、インポストの上のアーチ部分は 2 つともきれいに残っていて、小さな張り出しが付いたクラヴォー=コンソール（claveau-console／小さな張り出し石）がはめ込まれている。同じカスティヨン=デュ=ガールのサン=カプレ礼拝堂［30.2.11b］などポン・デュ・ガール周辺の聖堂と同じく、この古代建築の影響によると言われるものである。身廊の壁アーチの上のヴォールトの起拱点にはコーニスが水平に付けられている。このコーニスは、身廊北壁を分けるピラストルの部分では、円筒形のモールディングとなっている（ただしその半分は失われている）。

半円形の後陣には、近年修復保存の手が加えられている。壁面は内部においても外部においても、切り整えられた中石材がきっちりと積まれている。後陣の中央に開けられている細長い半円頭形の窓は、外側に向けては隅切りされておらず、あたかも銃眼のようである。その頭部は一枚岩のリンテルである。一方、内部に向けては隅切りされており、頭部は小型のクラヴォーがきれいに組まれている。さらにその窓の上は、小ビエットが並ぶ半円形のフリーズによって縁取られている。シンプルではあるが、美しい装飾と言える。この後陣は、内部では半ドームが架かるが、外部では半円形の壁面の上が多角形の台形となっている。これもまたこの礼拝堂がかつては要塞化されていた名残であると思われる。礼拝堂内部にあって後陣と身廊を区切るのは、南北のピラストルの上にインポストを介して架けられた二重の半円形凱旋アーチであるが、このアーチの内側のものを受け止めるインポストには、三角形がジグザグに連続する単純な線刻装飾が施されている。

30.2.11c　Saint-Christophe

なおこのサン=クリストフ礼拝堂から約 500 メートル南に行くと、カスティヨンの高台の南東端に位置する岩山の下に、17 世紀頃まで使われていたというカスティヨンのレプロズリー（léproserie）、すなわちハンセン病患者療養所であったとされるものの遺構が残されている。その詳しい歴史などはよく分からないが、岩場をくり抜いた洞窟のよう

な場所で、療養所と言っても実際にはハンセン病患者を隔離し閉じ込めるためのもの、あるいは彼らが人目を避けて隠れ住む場所であったと思われる。

Bibliographie：
Buholzer（1962）pp.132-133; Clément（1993）pp.218-219; Goiffon（1881）p.83.

30.2.12　サン=ティレール=ドジラン／サン=テティエンヌ礼拝堂（Chapelle Saint-Étienne, Saint-Hilaire-d'Ozilhan）

サン=ティレール=ドジラン（またはサン=ティレール=ドジアン）は、ルムーランから県道 D792 で北東へ約 5 キロである。12 世紀には、現在のコミューンの北東約 1.5 キロ山の上に城塞（castrum Sancti-Hilarii）があったが、今は塔の一部と城壁の遺構がわずかに残るのみである。1427 年にこの地方を襲った地震で被害を受けたこともあって、1441 年に国王シャルル 7 世の承認のもと、その石材を利用してすぐ下の平地に新たに城が建設された。今でも見られる四角い旧街区やその北東角に残された円塔（現在は住居に改造されている）などがその名残である。その後この新しい城を中心に集落が形成されるが、1570 年にコリニー（Coligny）率いるプロテスタント軍によって包囲され破壊された。1589 年にはカトリック同盟（la Ligue）に与している。旧街区の内側（南端）には 1538 年に建設されたゴシック様式のサン=テティエンヌ教会が、また旧街区の外には、すぐ北に隣接してサン=ティレール教会がある。後者はロマネスク様式を模して 19 世紀後半に建設された新しい聖堂で、現在の教区教会である。

ロマネスク様式のサン=テティエンヌ礼拝堂は、サン=ティレール=ドジランの集落から南東に向かう« Chemin de la Martine »を 600 メートル行ったところで右折してダートに入り 250 メートルである。ルムーランからだと、県道 D6100 を東（アヴィニヨン方面）へ 2.7 キロ行くと大きなロータリーがあり、そこから北へ向かう D192 に入る。2 キロほど進むと、さらに右（東）に細い道（ダート）が分岐するので、それを 500 メートル進むとサン=テティエンヌ礼拝堂に至る。この礼拝堂は、別名ラ・クラストル礼拝堂（Chapelle de la Clastre）あるいはサン=テティエンヌ・ドゥ・ラ・クラストル礼拝堂ともいう。

ラ・クラストルと呼ばれるこの場所には、もとは南フランスからイスラーム勢力が駆逐された後の 8-9 世紀頃に小修道院と付属聖堂（教区教会）が建てられ、その周囲には小さな集落も形成された。現在残るサン=テティエンヌ礼拝堂は、その小修道院の古い聖堂の跡に 12 世紀頃に建設されたものである。14 世紀に部分的に要塞化の工事が施されている。以前の聖堂から教区教会としての役割も引き継いでいたが、1538 年に現在のサン=ティレールの集落にゴシック様式の聖堂が新たに建設されたことに伴い、教区教会の役

30.2.12　Saint-Hilaire-d'Ozilhan

割もそこに移された。その後この古い礼拝堂は放棄され、ヴォールトも失われた。壁面などに崩落や亀裂が生じるなどして半ば廃墟化していたが、ようやく 20 世紀終わりから 21 世紀初めにかけて修復工事が進められた。

西ファサードは、左右両端に方形の扶壁が立ち上がり、上部は三角形の切妻となっている。三重のモールディングで装飾された半円頭形の扉口は 13 世紀ゴシック期のものである。アーキヴォルトの外側はやはり二重のモールディングに縁取られている。このモールディングのさらに上には、かつての扉口のアーキヴォルトの名残であるアーチ状の組石が残されている。西ファサード上部には 21 世紀に再建された二重のアーチの中に半円頭形の窓が 2 つ並べて開けられている。その窓の間には方形の太い柱と柱頭があって、左右の窓のアーチを受け止めているのであるが、そのアーチは向かって右側のものが大きく、したがって窓の幅も広い。それに対して左側のアーチは一枚石であるが小さくて、窓の幅も狭くなっている。このように 2 つ一組となった窓の左右の大きさが異なるというのは珍しい。なお右側の窓のアーチ部分は、近年に再建されたものであるので、かつてそれが組石であったのか一枚石（モノリス）であったのかは不明である。

身廊外壁には、南北ともに両端と、中央少し東寄りの所に、合わせて 3 つの扶壁が付けられている。身廊および後陣の壁面が、あまり整形されていない小・中石材が比較的ラフに積まれているのに対して、扶壁は整形された中石材がきっちりと積まれたものとなっている。南壁の西端の扶壁には、ちょうど中ほどの高さあたりに、騎士の絵が線刻された石がはめ込まれている。石の表面はかなり摩耗しているが、その騎士は兜をかぶり、盾と槍を持ち馬にまたがって戦場を駆けている。その騎士のすぐ右側にも大きな末広がりのチュニックのような形の衣服（あるいは鎧）を身につけて動物を槍で突き刺す人物がいる。この礼拝堂の壁には他にも単純な線刻画（graffiti）が刻まれた石がいくつか見られる。いずれも中世のもので、明らかに上下が逆になったものもあることから、それらが刻まれた後に、建物の壁にはめ込まれたものと思われる。またこれらの線刻が施された石は、ユゼスからニームまで建設されていた古代水道の石材を再利用されたものであるとも考えられている。

身廊北側の壁には窓はないが、南側には 2 ヶ所に窓が開けられている（各ベイに 1 つずつ）。銃眼のように細長い半円頭形のもので、隅切りされておらず、頭部のアーチはモノリスである。また南北共に、身廊の外壁には足場の木を差し込むための小穴がいくつも開けられている。この身廊北壁には、東側のベイの下端、すなわち中央の扶壁のすぐ左側に、小さな方形の出入口が開けられている。かつて礼拝堂北側にあった墓地に通じる「死者の扉口」で、何段か石段を登って外に出るようになっている。注目すべきはその出入口の上辺のリンテルで、近隣にあった古代ガロ=ローマ時代の住居で使われていたと思われる石灰岩で造られた長方形の敷居石が、横倒しにされリンテルとして再利用されているのである。扉がはめ込まれていた回転軸の穴などがそのまま残されている。この「死者の扉口」のちょうど真上にあたる身廊北壁の屋根には、かつて立っていた鐘楼と思われるもの（あるいは要塞化の時に造られた物見櫓の類いか）の土台部分があって、後陣の北側上部には、そこに登るための石段が 7 段ほど残されているのが認められる（ただし近年の修復の手が加えられている）。

身廊南壁の東側のベイには、13 世紀になってトランセプトのように「聖アンナの礼拝室」が建てられていたが、16 世紀になって取り壊され、身廊内部に向けて開いていたその礼拝室の大きな尖頭形アーチだけがそのまま残されている。筆者が最初にここを訪れた 2005 年には、このアーチは石の壁で完全に塞がれていたが、次に訪れた 2019 年には再び開けられたうえで分厚いガラスがはめ込まれ、礼拝堂の身廊内部が見えるようになっていた。取り壊されたこの礼拝室は、方形の土台も残されており、その内側の地面（新しいガラス窓のすぐ下）には人型にくり抜かれた 7 世紀頃の石棺が置かれている。

半円形の後陣は 14 世紀の要塞化工事によって、高さが加えられている。壁面はあまり整形されていない小・中石材がラフに積まれたものとなっている。足場用の小穴がいくつも開けられているが、窓などの開口部はまったくない。

礼拝堂内部は、2 ベイからなる身廊の東に半円形の後陣が続くというシンプルなものである。木組みの天井となっていて、横断アーチなどはない。側壁に付けられた方形のビラストルによってベイが分けられる。各ベイには天井近くまで立ち上がる半円形の壁アーチが付けられている。南側の 2 つの壁アーチには、それぞれ内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。外側は銃眼のような仕様であるが、内側はロマネスク様式の美しい窓の作りとなっている。身廊北壁の東側のベイの上には、上部構造物を支えるためのコルボーと、縦に穴の開けられた張り出し組石が 2 つ残されている。これは木造天井の木組みを支えるためのものであったのか、あるいは 14 世紀に要塞化された際の名残（マシクーリを支えるもの）であろうか。

西ファサードに開けられた扉口は、外側では半円頭形であったが、内側では縦長の長方形である。ただしその上辺のさらに上には半円形アーチの石組みが残されている。身廊東端の後陣も高さがあるが、その平面プランは、下の 3 分の 2 は半円形であり、水平に巡るコーニスから上 3 分の 1 は、4 つの面を持つ多角形となっている。これもまた 14 世紀の要塞化工事によるものであろう。

Bibliographie：
Clément (1993) pp.397-398; Germer-Durand (1868) p.209; Goiffon (1881) pp.297-298; Paillet（1986）pp.152-160; Trenquier（1851）pp.27-28; RIP.

30.2.13a　ルムーラン／旧ノートル=ダム・ドゥ・ベトゥレエム教会 (Ancienne église Notre-Dame de Bethléem, Remoulins)

ルムーランは、有名な世界遺産の古代水道橋ポン・デュ・ガールに近く、その陰に隠れてしまって観光などでもあまり注目されることがない。しかしガルドン川沿いにあって、アヴィニヨン（23 キロ）、ユゼス（16 キロ）、ニーム（22 キロ）などの主要都市のちょうど中間に位置しており、古くから交通の要所であった。ケルト時代にはガルドン川西岸の小山（現在はサン=ボネ=デュガールのコミューン域内）の上にヴォルク=アレコミク族のオッピドゥム（oppidum du Marduel）があった。ローマ時代には、ユゼスからニームまで水を供給する水

道が、やはりガルドン川西岸の山沿いに建設されていた。

ガルドン川東岸に位置するルムーランの名が「カストルム」として歴史の舞台に登場するのは、ようやく 12 世紀に入ってからのことである。13 世紀初め頃まではトゥールーズ伯とヴィヴィエ司教がルムーランに対する権益を分け合っている。1229 年、アルビジョワ十字軍の終結によってラングドックがフランス王領に編入されると、ルムーランも王権の支配下に入った。しかし 1290 年になって、ユゼスの領主ベルモン 3 世（Bermond III d'Uzès）が、エグ=モルト近くに所有していた塩田（salines de Peccais）と引き換えに、国王フィリップ 4 世（ル・ベル）からルムーランを獲得した。百年戦争期の 14 世紀には城や教会、そして隣接する住居などを防御するための周壁が建設された（その一部は旧市街の南東角などに残っている）。16 世紀の宗教戦争期には、カトリックとプロテスタントによる争奪戦が繰り返された。ナントの勅令（1598 年）以降も、南フランスではルイ 13 世と枢機卿リシュリューがユグノー（プロテスタント）に対して圧力を加えたことで騒乱が続いた。大革命が起こると、ルムーランの司祭はイタリアに逃れている。

1830 年にはガルドン川に架かる全長 120 メートルの吊り橋が建設された。これは 19 世紀にフランス各地で吊り橋や鉄道建設を行ったことで知られるスガン社のマルク・スガン（Marc Seguin）の設計によるものであった。その後 1937 年にその橋のすぐ北側に新しい橋が完成し、事故や老朽化などで傷んでいた古い吊り橋は取り壊され、今ではかつて吊り橋を支えていた主塔（culée）だけが川の東西両岸に残されている。なお現在の橋は 1994 年に完成した最新のもので、およそ 160 メートルの長さがある。

旧ノートル=ダム・ドゥ・ベトゥレエム教会は、ルムーランの旧市街区（旧カストルム）の北端の緩やかな斜面に建っている。その名から、第 1 回十字軍（1096–1099 年）の後に、それに参加したルムーランの騎士たちの祈願によって建てられたものと考えられている。その後、ユゼス司教区の中にあって、首席司祭が管理する教区教会としての役割を果たしていた。宗教戦争によって被害を受け、修復された後の 1538 年に再献堂されている。大革命の後、1817 年に新しくノートル=ダム=エ=サン=マルタン教会（Église Notre-Dame-et-Saint-Martin）が建設されたため、教区教会としての役割を終えた（大理石製の主祭壇も移された）。建物は学校、教職員や農村管理人の宿舎、監獄、裁判記録保管庫、そして 1977 年までは村役場として使われた。その後は建物の老朽化が進み、一般の立ち入りも禁止されてそのまま放置されていたが、2015 年から修復工事が始められ、土台部分が補強されるとともに屋根なども新しいものに変えられた。2022 年現在も文化イベントなどさまざまな目的に利用するべく建物内部の修復が進められている。

30.2.13a　Notre-Dame de Bethléem

もともと聖堂が建設されたのは 12 世紀前半頃のことであるが、13 世紀にかけて改修と

拡張が行われたため、建物にはロマネスクからゴシックへの過渡期の特徴が見て取れる。全体的な平面プランは長方形で、後陣も方形となっている。最も印象的なのは南側ファサードである。14 段の石段を登ると、大きな鐘楼の下の半円頭形のポーチとその中に開く扉口の前に出る。扉口は、3 重の半円形アーキヴォルトが架かる 19 世紀のものであるが、そのアーキヴォルト自体がさらにそれ以前の大きな半円形のアーキヴォルトの下に作られたものとなっている。ポーチの上には鐘楼と小塔が立ち上がる。13 世紀以降に作られた鐘楼は南北方向を向いた 3 段構えで、鐘を吊すためのベイが下から 3 つ、3 つ、1 つと、合計 7 つが重なるアーケードとなっている（大きさは上に行くほど小さくなっている）。アーケードが重なる鐘楼のこうした仕様は、この地方では珍しいものであるが、例えば同じラングドックでもジェヴォーダン（ロゼール県）ではしばしば見かけるものである。なおこの鐘楼の一番上の三角形の頭頂部は部分的に失われていたが、現在は復元されている。鐘楼の手前には、南壁の扉口の上に、一番上がピラミッド形となった小塔が立っている。これは 1712 年（または 1713 年）に、時計塔として作られたものであるが、聖堂全体のプロポーションの調和を乱しているとして評判が悪い。また身廊南側の増築部分には、19 世紀になって学校として使用するために方形の大きな窓が 2 つ開けられた。そのすぐ上には大きくて丸い水落し（雨どい）が横に 6 つ並んでいる。大きな窓は、身廊の上部（2 階部分）にも開けられている。

上部が切妻形になった聖堂西壁は、土台部分を除いて、整形された中石材がきれいに積まれている。切妻の中央には、半円頭形の枠の中に方形の窓が開けられている。また足場用の小穴がいくつも見られる。出入口の類いはない。一方、中世の城壁の遺構が接続する東壁すなわち平面形の後陣には 19 世紀に方形の窓が 3 つ開けられている。また現在の切妻すぐ下に 12 世紀の切妻のラインを見ることができる。身廊の北側にはトランセプト様の南北幅の狭い祭室が付けられ、そのすぐ北に、城塞の主塔が建っている（聖堂とは直接は接していない）。

聖堂内部のもともとの基本プランは 3 ベイからなる身廊に方形の後陣が付くというもので、13 世紀以降に身廊の南側に 3 つの側室が、また北側にはトランセプト様の祭室が 1 つ増築されている。1819 年、学校として使用するために身廊と内陣の間に隔壁が作られた（その壁には教育用の地図などが描かれている）。さらに 1825 年、今度は法廷や役場として使用するため、もともとあったトリビューンを取り除き、セメントの床を作って内部を 2 階建てとした。最近の修復工事の際にこの床は取り払われ、もとの身廊の空間が復元されている。この身廊の南北には各ベイごとにロマネスクによく見られる半円形の壁アーチが並ぶ。天井はゴシック的な尖頭ヴォールトであるが、その形は横断アーチも含めて迫り高が少ない四心アーチ様である。このような形のヴォールトは、ガール県では珍しい。

旧ノートル=ダム・ドゥ・ベトゥレエム教会のすぐ北側には、先にも触れたように方形の主塔（la tour du Donjon）が残っている。もともとは 12 世紀に建てられた城塞のものである。塔の内部は 2 階建てで、それぞれの階の天井はゴシック様式の交差リブ・ヴォールトとなっている。1 階部分は後に監獄、役場、そして浮浪者の収容施設などに使用された。2 階は裁判所であった。20 世紀になると貯水塔としても使われた。近年になって貯水施設が取り払われ、2 階の部屋には見事な暖炉があったことが明らかになっている。

なおルムーランの旧市街から約 2.5 キロ南東に行くと、14 世紀からこの地の有力家系であったラバス一族が 15 世紀になって建設した城が残っている。城と言っても建物自体はルネサンス様式の居館である。

Bibliographie：
BMR (janvier 2016) p.10, pp.17-19; Chupin et al. (2008) pp.259-263; Goiffon (1881) pp.234-235; *ML* (22.12.2021)；Sallustien-Joseph (1899) pp.105-106; Trenquier (1851) pp.20-22.

30.2.13b　ルムーラン／サン=マルタン・ドゥ・フェルリエール礼拝堂 (Chapelle Saint-Martin de Ferlières, Remoulins)

ルムーランの旧市街から約 1 キロ東に向かい、県道 D6100 と D6101 が交わる大きなロータリーの手前（西）150 メートルのところで南に入ってさらに 50 メートルである。ルムーランの鉄道駅からは 200 メートルほど東の住宅地の中である。もとはここには 8 世紀にイスラーム勢力に勝利したカール・マルテルを記念して建設された小聖堂があったとも言われるが、現在の礼拝堂の建設は 12 世紀頃のことである（ただし 10-11 世紀にさかのぼるとの見方もある）。後陣の周囲からはさらに古い 5-6 世紀頃の墓も見つかっている。P. A. Clément によれば、この礼拝堂は、現在のヴェール=ポン=デュ=ガールのコミューン内にあるサン=プリヴァの城塞教会（当時のものは現存せず）に付属する礼拝堂であった。そのサン=プリヴァの教会自体、アヴィニヨンのノートル=ダム=デ=ドム司教座聖堂参事会の管理下にあった。宗教戦争期の 1567 年にプロテスタントによって破壊され、しばらくの間放置されていたようであるが、1707 年になってようやく修復が始まった。ヴォールトが架け直され、西ファサードなども新しいものに作り替えられ、再び献堂された。現在はプロテスタントの礼拝に使用されているが、それ以外にも文化イベントの類いが行われたりしている。

西ファサードは今も触れたように 18 世紀初めのもので、扉口は太い側柱の上に半円アーチが架かる。その上には丸窓が開くが、これもまた新しい。よく見るとその丸窓のすぐ上に、古い丸窓の枠の石組みが残されている。切妻は三角形の古代風ペディメントで、一番上には細長い鐘楼が立つ。ただし鐘は吊されていない。この西ファサードの左右両端に付けられている扶壁は、ロマネスク期のオリジナルのものであると思われる。サン=ティレール=ドジランのサン=テティエンヌ礼拝堂［30.2.12］の西ファサードの扶壁の様子とよく似ている。

30.2.13b　Saint-Martin de Ferlières

身廊と後陣はやはり 12 世紀の姿をそのまま残している。身廊の南北両側の外壁には扶壁が並ぶ。北側には開口部は見られないが、南側には銃眼のような細長い窓が 2 つ開けられている。またこの南壁には足場用の小穴が、

等間隔にいくつも並べられている。半円形の後陣は、下半分が少し外側に張り出している。中央（東端）には、身廊南壁と同じく銃眼のような窓が開けられていたが、現在は完全に埋められてしまっている。

聖堂内部は 2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が続く。近年の修復によって漆喰がきれいに塗り直されている。身廊側壁には半円形の壁アーチが並び、アーチの起拱点に付けられたインポストにはチェック柄やひねり紐状のモールディングも見られる。半円形の後陣には半ドームが架かる。2001 年の修復工事の際に、その半ドームに描かれた 12 世紀頃のフレスコ画の一部が見つかっている。後陣の中央に開けられていた細長い窓は、今は埋められてしまっている。

Bibliographie：

BMR（janvier 2016）p.17; Clément（1993）p.397; Trenquier（1851）p.23; RIP.

30.2.14　サン=ボネ=デュ=ガール／サン=ボネ教会

（Église Saint-Bonnet, Saint-Bonnet-du-Gard）

ルムーランからガルドン川を渡って県道 D6086 を西へおよそ 2 キロでサン=ボネ=デュ=ガールの村で、サン=ボネ教会は、この村の東にある一段高くなった小丘の上に、墓地に囲まれる形で建っている。その墓地側から見た時の要塞化された後陣およびトランセプトの姿が印象的である。それらの最上部にメルロンが並ぶ様子は、後陣の形こそ異なるけれども、サン=ローラン=デ=ザルブル［30.1.26］を思い起こさせる。

古代には、ユゼスからポン・デュ・ガールを経てニームまで導水していた水道が現在のサン=ボネの村を通り、ちょうどサン=ボネ教会のある小丘をぐるりと回るように作られていた。そのため古代水道の石材（tuf）が、この聖堂の建設にも使用された。中世以来、この地は地中海から続く塩の道の中継地点にあたった。10 世紀にはカストルムとして史料にその名が現れる。993 年、プサルモディ修道院（Abbaye de Psalmody／エグ=モルトの北東約 6 キロ）がサン=ボネの領主からこの所領とここにあったプリウレ（小修道院）を譲られた。それ以来、サン=ボネの小修道院長は、サン=ボネの村の領主でもあり続けた。またここは大革命までニーム司教区に属する小教区であった。

サン=ボネ教会は、もともとは小修道院付属聖堂として 9 世紀半ば頃に建設されたとされるが、現在の建物は 11 世紀のものである。後陣は真東ではなく少し南東方向に傾いている。身廊は外壁も薄く、扶壁も付けられていないことから、最初は木造の屋根が架けられていたと思われる。プサルモディ修道院の傘下にあって、12 世紀から 14 世紀にかけて、漸次要塞化が進められた。まずトランセプト両翼が高くされて城塔化された。また身廊の壁も同様に高さが加えられ、巡回路を設けるためのコーベル（持ち送り、突き出し）が並べられた。同時に身廊内部には、側壁に方形のピラストル（壁付き柱）が作られ、そのピラストルによって分けられたベイには半円形の壁アーチが付けられた。そのピラストルの上には横断アーチと石造りの半円筒形ヴォールトが架けられた。五角形の後陣も高さが加えられ、トランセプトの塔と高さがそろえられて、メルロンなどが並べられた。さらにまた西ファサードのホーチ様の張り出し部分も

加えられた。その後、18 世紀になって小修道院としての役割は終わるとともに、聖堂の建物はアレスの司教座聖堂参事会の管理下に置かれた。

西ファサードには半円アーチが開く縦に長い張り出しが、あたかも大きなポーチのような形で作られ、その半円アーチの部分には襲撃者を撃退するためのマシクーリ（出し狭間）が作られている。西ファサードにこのような形でマシクーリを作るよく似た例は、例えばロゼール県のブール=シュル=コラーニュのル・モナスティエ［48.6.12a］あるいはエロー県のマグローヌにも見られるものである。なおこの張り出しの上の頭頂部は現在は失われている。扉口は半円筒形のシンプルなもので、西ファサード壁面の上部には、ビエットの連なるモールディングによって縁取られた半円頭形の窓が開けられている。一番上には 19 世紀に作られた小さな鐘楼が立っている。

身廊南壁には、半円頭形の窓が 3 つ開けられている。また半円頭形の出入口が、今は埋められているが、やはり西端に残されている。この出入口はかつて聖堂の南側にあったであろう回廊や小修道院の建物と接続していたものと思われる。南壁の上部には、城塞化された際に、巡回路を巡らせるために埋め込まれたコーベルが等間隔に並んでいる（形は水落としに似ている）。この巡回路は作られた後撤去されたのか、あるいは結局作られずに終わったのかは不明である。身廊の北側の壁にもコーベルが 2 つだけ残されている。壁面に窓などの開口部はないが、西の端にかつて開けられていた 2 つの出入口の痕跡が残されている。この出入口のうち西側のものは半円アーチ、東側のものはセグメンタル・アーチである。この後者のものは、かつては隣接する墓地へ通じるいわゆる「死者の扉口」であったのではないかとも思われる。

トランセプトは南北ともに高さのある方形の城塔となっており、最上部にメルロンが並ぶ。メルロンのいくつかには細長い銃眼が開けられている。また中ほどの高さの所に丸窓が開けられ、さらにその上にはやはり細長い銃眼のような開口部が付けられている。南側の翼廊の塔には西面と東面に出入口が開けられているが、半円頭形のアーチが架かる西面のものは、身廊の巡回路に出るためのものであったのであろうか。南翼廊のさらにその南側には聖具室が増築されている。北翼廊の壁面には、城塔化される前の三角形の切妻の名残が残されている。そこには足場を組むための小穴がたくさんあるのが認められる。同じく北翼廊の東面の下には、方形の張り出しが作られ、その中央には銃眼様の細長い開口部が付けられている。

30.2.14　Saint-Bonnet-du-Gard

五角形の後陣は、トランセプトと高さが揃えられ、メルロンなどの防御が施されている。五面のうち、東側の面のメルロンにのみ銃眼が付けられている。またこの東面には下部に半円頭形の窓が開き、クラヴォーが組まれたアーチ部分は、半円形のモールディングに縁取られている。後陣およびその左右のトランセプトの壁面は、不整形の小石材が荒積みされているが、角石部分は整形された大石

材が積まれている。また後陣とトランセプトの北側の翼廊東面では、中ほどの高さのところに、やはり整形された大石材の水平の列が認められる。後陣の北東面と南東面には、水落しが 1 つずつ突き出ている。

サン=ボネ教会内部は、3 ベイからなる身廊とその東にトランセプトと後陣が続く。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。方形のピラストルとその上に架かる半円形の横断アーチによってベイに区切られ、それぞれのベイの側壁には、高さの異なる半円形の壁アーチが上下二段構えで付けられている。上段のアーチはヴォールトの起拱点に水平に付けられたコーニスのすぐ下まで届き、下のアーチはその 2 メートルほど下の位置に付けられている。身廊南側では、下側のアーチの中に、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。これら二段の壁アーチには、そのアーチの起拱点にそれぞれインポストが付けられているので、インポストが段違いになって連続しているように見える。また上段のアーチには、この地域の他の聖堂にもよく見られるようなクラヴォー=コンソールがはめ込まれている。交差部と後陣の柱、アーチ、壁面は 19 世紀になって彩色され、さまざまな装飾が描かれた。トランセプトの南北の翼廊にはそれ以前に描かれたフレスコ画がわずかに残っているのが見られる。

内陣を兼ねる交差部と身廊の間には凱旋アーチがあり、左右に広がる緑豊かな葉とその中央に丸い光の輪、そしてその中に鳩らしきものが描かれている。主祭壇は交差部に置かれ、後陣は交差部から石段を 3 段分だけ上った高さのところにある。その平面プランは半円形で、下半分は木製のパネルが巡る。中ほどには半円頭形の窓が開けられ、ステンドグラスがはめられている。後陣に架けられた半ドームには青地に放射状のリブと数多くの黄色い星の絵が描かれている。

サン=ボネ（聖ボネ／聖ボニトゥス）は 623 年頃、オーヴェルニュのセナトール貴族の家系に生まれた。メロヴィング朝フランク王国（アウストラシア）の国王キルデベルト 3 世に司法官として仕え、プロヴァンスの統治にも関わった。690 年頃からおよそ 10 年間、クレルモンの司教となる。その後マンリュー修道院（クレルモンの南東 35 キロ）に引きこもり、最後はローマへの巡礼の帰りにリヨンで没している。聖母マリアを崇敬し、清貧な生活を続けるとともに、奴隷の解放にも尽力したとされる。

Bibliographie：

Buholzer（1962）p.133; *CAG,* 30/3, pp.568–577; Clément（1993）pp.77–78; Goiffon（1881）pp.259–260; Morel（2007）pp.58–59; Nougaret et Saint-Jean（1975）pp.41–42; Trenquier（1851）pp.11–12; RIP.

30.2.15　セルナック／サン=ソヴール教会（Église Saint-Sauveur, Sernhac）

ルムーランからガルドン川を渡って県道 D986L を南へ 3 キロ進み、さらに D205 を西へ 1.2 キロである。ユゼスから導水していた古代のローマ水道は、直線距離にして約 2 キロ北にあるサン=ボネ=デュ=ガールから南下し、このセルナックの集落の西端に沿ってニームに向かっていた。その一部は今もセルナックの北の地下にトンネルとして残っている。1169 年の史料にセ

ルナックの古名である« Sarnacum »が現れる。サン=ソヴール教会は、もともとはカール・マルテル（あるいはシャルルマーニュ）が 736 年にラングドックでイスラーム勢力に対しておさめた勝利を記念してこの地域に建てた聖堂の 1 つであると言われる。聖堂の名である« Ecclecia Sancti-Salvatoris de Sernhaco » が史料に現れるのは 1260 年のことである。15 世紀半ばから 1780 年まで、小修道院付属聖堂としてモンペリエのサン=ルフ・コレジアル教会（参事会聖堂）の管理下にあった。1578 年にはプロテスタント勢力によって破壊され、1607 年に再建された。教区としてはニーム大司教区に属した。18 世紀、フランス革命が起こる少し前にサン=ルフ修道会が廃止された後は、ニームの神学校（Séminaire de Nîmes）が引き継いだが、革命の後は一時的に理性の神殿に変えられるなどしている。

現在残る聖堂の大部分は 17 世紀になって再建されたものである。もとの平面プランはラテン十字形で、トランセプト北側の翼廊だった場所（現在の聖堂の北東端の位置）に、方形の鐘塔が建設されている。さらに 1861 年になって一番上に聖母マリアの白い立像が立てられた。かつての西ファサード（その上部の壁面は崩れたままになっている）の西側には、さらに方形の建物が増築されており、その南側に古典様式の扉口が付けられている。身廊部にはゴシック様式の窓が開けられている。聖堂東端、すなわち方形の塔のすぐ南側に、ロマネスク期のものと思われる半円形の小さな後陣部分が残されている。壁面は中石材がきっちりと積まれたものであるが、途中からその上に五角形の塔が建てられている。13-14 世紀頃に要塞化された際の名残であろう。なお現在この部分は住宅に囲まれており全体の様子を見渡すことは難しい。

聖堂内部は三廊式で 3 ベイからなる。天井は交差リブ・ヴォールトで、壁面や柱、そしてヴォールトなどは 19 世紀後半以降に彩色画が描かれてきれいに整えられている。

Bibliographie：

Germer-Durand（1868）p.236; Goiffon（1881）pp.375-376; Web-site: Nîmes Métropole（Sernhac）.

30.2.16　フルネス／サン=ピエール礼拝堂（Chapelle Saint-Pierre, Fournès）

フルネスのコミューンは、ルムーランから県道 D6100 と D19 で南東に約 4 キロである。サン=ピエール礼拝堂は南西の村外れにある。フルネスの新しい教会と八角形の時計塔がある教会広場（Place de l'Église）から« Rue du Jeu du Mail »（C5）を西へおよそ 700 メートル行くと県道 19B と交わるが、そのままダートの細い道を直進する。200 メートルほどで斜め左（南西）方向に道が分かれるので、その道に入って 250 メートル進むとサン=ピエール礼拝堂に至る。

フルネスは 8 世紀には西ゴートやイスラーム勢力の支配を受けた後にフランクの統治下に入った。12 世紀半ばに城塞が築かれ、13 世紀にはカストルムとしてその名（Castrum de Fornisio）

が現れる。サン=ピエール礼拝堂は、伝説によると 8 世紀にカール・マルテルが「カンプリオの戦い」でイスラーム勢力に勝利したことを記念して建設されたとされる。しかし近年の修復によってその外観はあまり古さを感じさせない。通常とは異なり南北方向に建てられ、後陣は北を向いている。長方形の身廊に半円形の後陣が続く。身廊側壁には南北に半円頭形の窓が開けられ、後陣部との間に扶壁が付けられている。後陣の中ほどには、ごく小さな開口部が見られる。西ファサードは上部が三角形のペディメントで、19 世紀に半円頭形の扉口が作られた。その上には丸窓が開けられている。壁面は、西ファサード、身廊部、後陣と、全て不整形の小石材が荒く積まれたものとなっている。

30.2.16　Saint-Pierre de Fournès

礼拝堂内部は、長方形の単一ベイに半円形の後陣が続く。身廊の東西両側に開けられた窓は半円頭形で、内部に向けて隅切りされている。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。身廊と後陣を分ける半円形の凱旋アーチは、インポストを介して方形のピラストルが受け止めている。後陣の石積みには 3 つの層が認められ、下半分には整形された大石材も見られるが、その上の層は比較的整形された小石材が積まれている。後陣の半ドームの一番上の層は（身廊部のヴォールトとともに）、現在はモルタルで塗り固められている。後陣の中央にはごく小さな三角形の開口部が付けられている。この後陣の様子が、ロマネスク期の雰囲気を最も今に伝えるものとなっている。

なおフルネスは、ナポレオンの大陸軍の将軍の一人であるジャック・ローラン・ジリー（Jacques Laurens Gilly）の出生地でもある。彼の名は、今もパリの凱旋門に刻まれている。

Bibliographie：
Trenquier（1851）pp.12-14; RIP.

30.2.17a　テジエ／サン=グレゴワール教会（Église Saint-Grégoire, Théziers）

テジエはルムーランから県道 D19 を南東に約 8 キロ、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンからだと D2 を西へ向かい、アラモンを経由して約 20 キロである。サン=グレゴワール教会はテジエの村のほぼ中央の岩盤の上に建っており、頭頂部が三角形になったひときわ高いその鐘楼は、遠くからでもよく見える。

テジエは古代には« Tedusia »と呼ばれ、もとはギリシア神話に登場するアテネの英雄テセウス（Thésée）に由来するとされる。中世になると城塞が築かれカストルムとなった。サン=グレゴワール教会はもとはその城に付属する城塞教会であったようである。ただしこの城塞自体についてはよく分かっておらず、考古学的にもはっきりとした痕跡は認められない。村の北東

にある小丘（montagne du Castellas）にも城塞があったようで、こちらの遺構はわずかながら残されている。テジエの村は中世の間はユゼス司教区の中のルムーラン主任司祭管区に属していた。14 世紀初めからモンフラン（Montfrin）の領主が支配し、15 世紀初め頃に村全体を囲む周壁が建設されている。16 世紀の宗教戦争の際にはナヴァラ王やコンデ公、コリニー提督などのプロテスタント勢力に攻撃されて降伏している。特にコリニーの軍はここで多くのカトリック教徒を虐殺したと言われる。その際、村やその周壁などもかなり破壊された。

サン=グレゴワール教会の平面プランはほぼ正方形であるが、実際は 3 つの聖堂が合体したものである。最も古いのは 12 世紀初め頃のロマネスク期に建てられた北東側の建物で、16 世紀にその西側に聖母の礼拝室（Chapelle de la Vierge）が、さらに 17 世紀になって南側に新たに大きな身廊が増築された。

ロマネスク期の部分は 2 ベイからなる古い身廊と半円形の後陣からなる。後陣は最初に建設された後に要塞化されて高さが加えられている。高さのあるこの後陣が岩盤の上に立ち上がっているために、東側から見ると、聖堂というよりはむしろ城塞建築のような印象さえ受ける。その岩盤は中がくり抜かれて聖具室が作られている。後陣の壁面は整形された長方形の大石材と平たい石材が組み合わされて積まれている。後陣東端の中ほど少し下に、半円頭形の小さな窓が開けられている。その頭部のアーチは一枚石で、クラヴォー状の装飾が線刻されている。後陣の上（正確には凱旋アーチの上）の三角形の頭頂部を持つ鐘楼は 17 世紀に作られ、19 世紀に改修されたもので、半円頭形のベイが 2 つ並び、それぞれに鐘が吊されている。鐘楼の西側の壁面には、そこに登るための石段が付けられているのが見える。またこの鐘楼の南北に接する形で、かつてその鐘楼にまで達していたと思われる壁の遺構が部分的に残されている。

この後陣部から聖堂の北側に回ると、ロマネスク聖堂部分の身廊北壁の西側に 16 世紀に増築された聖母の礼拝室が接続している様子が、建物自体の高さの違いもあってよく分かる。12 世紀の北壁には、頭部の半円形アーチがその下の長方形の開口部よりも大きくなった、いわゆる馬蹄形アーチが付けられている。また 16 世紀の聖母の礼拝室の北壁にはトレーサリーの付けられた尖頭形のゴシック様式の窓が開けられている（ただし現在は塞がれている）。12 世紀の聖堂の西壁上部は、聖母の礼拝室の高さが低いことから、そこには半円形アーチの枠組みの中に小円柱で中央を支えられた 2 つの半円頭形の窓が開けられているのがよく見える。ただしこの小円柱は 20 世紀になって新しく作り直されたものである。またこの聖母の礼拝室には北西の角に斜めに付けられた扶壁がある。

30.2.17a
Saint-Grégoire de Théziers

西ファサードは 16 世紀の聖母の礼拝室の西壁と 17 世紀に増築された聖堂の西壁が合体したもので、整形された中石材がきっちりと積まれてはいるが、3 ヶ所に付けられた雨落としからの排水によって部分的に変色して、決

してきれいな状態であるとは言えない。17 世紀の建物部分に、隅切りされた丸窓が 1 つだけ開けられている。聖堂の南壁には 4 つの扶壁が並んでいる。東側の 2 つのベイにはそれぞれ半円頭形で縦長の窓が開けられている。最も西側のベイの 6 段の石段を登ったところに古典様式の扉口がある。ドーリア式のピラストルの上に三角形のペディメントが載り、そのペディメントの上に、さらに小さなイオニア式のピラストルとペディメントが立ち上がるというものである。下段のエンタブラチュアのフリーズ部分には縦溝装飾のトリグリフ（トリグリュフォス）が 6 つ並び、中央のメトーブには牛の頭が彫刻されている。上段の 2 つのピラストルの間はニッチで、そこには教皇と思われる彫像が置かれているが、それがどの教皇のものなのかは不明である。

この扉口から聖堂内部に入ると、そこは 3 ベイからなる 17 世紀の大きな身廊で、平面プランは長方形である。天井には水平のコーニスの上に半円筒形トンネル・ヴォールトが架かり、半円形の横断アーチがベイを区切っている。横断アーチを受け止める円柱の柱頭には、カロリング様式を模した彫刻が施されている。東端の内陣にはやはり古典様式のペディメントを持つ祭壇が作られている。また内陣と身廊の壁面およびヴォールトにはすべて 19 世紀の彩色画が描かれている（ただしかなり色あせている）。2 ベイからなる 12 世紀の古いロマネスクの礼拝堂部分は、尖頭形の大きなアーチで隔てられる形で 17 世紀の身廊の北側に並ぶが、20 世紀半ばに 2 階部分（一種のトリビューン）が作られて、縦空間が完全に分断されてしまっている。さらに東端にある本来は半円形の後陣も壁でふさがれており、天井には交差リブ・ヴォールト（17 世紀）が架かる。また 2 つのベイのうち東側のベイには、鐘楼に登るための階段が付けられている。こうしたわけで、この古い礼拝堂部分にはかつてのロマネスク期の面影は、残念ながらあまり残されていない。この礼拝堂の西側が、1537 年に増築された正方形の聖母の礼拝室である。天井には十字形の枝リブを伴った放射状リブ・ヴォールトが架けられている。

Bibliographie：
Goiffon（1881）pp.375–376; Base Mérimée（Église paroissiale Saint-Grégoire）; Site officiel de la commune de Théziers（Histoire de Théziers）.

30.2.17b　テジエ／サン=タマン礼拝堂（Chapelle Saint-Amant, Théziers）

サン=タマン礼拝堂（Saint-Amant または Saint-Amand と表記される）は、テジエの村から県道 D19 で北東へおよそ 1 キロにある。県道からは 200 メートルほど森の中の小径を北へ入る。この場所の歴史は古く、古代ガロ=ローマ時代には異教の神殿が建てられていた。墓地もあったようで、サン=タマンの小後陣に置かれている古代の墓石からもそれがうかがわれる。西ゴート時代にはすでに小さな礼拝堂も建てられていた。11 世紀にはそこに新たに礼拝堂が建設されたが、この 11 世紀の礼拝堂も、さらに 12 世紀後半頃に現在われわれが目にする建物へと改築された。その頃、この礼拝堂は、マルセイユのサン=ヴィクトール修道院の傘下にあったため、建物や内部の装飾にもプロヴァンスの影響が色濃く見られる。もともとはペトロに捧げられ、サン=ピエール礼拝堂と呼ばれていたが、中世の間に現在の名前（Sanctus-Amantius de

Tezeir）に変わったようである。また中世以来、ここは病気治癒を祈願する巡礼が訪れる場所でもあった。礼拝堂のすぐ西側には、彼らが体を清めるために用いたとされる井戸が残されている。18 世紀までユゼス司教区にあってユゼス大聖堂（司教座聖堂）参事会の管理の下に置かれていた。

サン=タマン礼拝堂の平面プランは身廊部が南北幅のある大きな長方形で、その東側に張り出しの小さめなトランセプトと半円形の後陣が付けられている。南北に長いために、西ファサードおよび後陣側から見た時のその姿は、大変に安定した印象を与えるものとなっている。西ファサードは上部が切妻形で、中央には外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。壁面は、ちょうどその窓あたりまでが整形された大きめの石材がきっちりと積まれたもので、窓から上はそれよりも小さめの石材による石積みである。向かって右下には半円頭形の出入口が見られるが、現在は埋められている。

身廊の南北の外壁にはそれぞれ強固な方形の扶壁が 2 つずつ付けられている。北側には開口部はない。南側には扶壁で区切られた各ベイの中ほどの高さの所に、外側に向けて隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が 1 つずつ開けられている。向かって左側のベイの下に、礼拝堂の扉口がある。半円形のアーチが 2 つ重なっている。外側のアーチを左右で受け止めていた小円柱は失われている。向かって左側に残されているインポストには三角形のギザギザと曲線や小さな丸などの線刻が施されている。この外側のアーチのクラヴォーには、直線のモールディングとともに歯車文様（尖っていたり丸くなっていたりする）が連ねられている。内側のアーチは無装飾である。

張り出しの少ないトランセプトには、南北両側ともに窓が開けられているが、南側のそれは半円アーチが二重になったロマネスク様式である。北側のものは窓自体は半円頭形であるが、外側の枠は方形である。また南側のトランセプトの壁面には、上部の屋根との境に、歯車形のコーニスが斜めに付けられている。

東側から見た礼拝堂の後陣の姿は、トランセプトが南北に長いために、西ファサード同様に非常に安定感のあるものとなっている。中央には半円形の主後陣があるが、その左右の土台部分には改築される前の 11 世紀の古い礼拝堂の小後陣の石積みが残されている。ただし主後陣の左右にある現在の小後陣は、外側からは見えない。主後陣の石積みは、下半分（特に一番下の土台部分）は整形された中石材によるが、中央に開けられた細長い半円頭形の窓の部分から上は不整形の小石材がラフに積まれている。主後陣の上の、ちょうど内陣の上にあたる部分には方形の建物が作られていて、その東面の中央に半円形の大きな窓が開けられている。この方形の建物のさらに上には切妻形の小さな鐘楼が立ち上がる。またこの方形の建物の南北両側にはトランセプト

30.2.17b　Saint-Amant de Théziers

の両翼に向けて、身廊の屋根と同じ角度で段々状に低くなっていく壁が付けられている。この段々状の壁もサン=タマン礼拝堂の東側の印象をユニークなものにしている要素の1つである。

礼拝堂内部は、南北幅が約 10 メートルという身廊と、その東側に東西幅の狭いトランセプト、そして半円形の主後陣とその左右に並ぶやはり半円形の小後陣が続く。2 ベイからなる身廊の南北両側の壁には三重になった大きな半円形の壁アーチが並んでいる。その壁アーチには、この地方のロマネスク聖堂にしばしば見られるように、クラヴォー=コンソールがいくつもはめ込まれている。南側の壁アーチには、外側に向けてと同様に内部に向けても隅切りされた半円頭形の窓がそれぞれ 1 つずつ開けられている。そのうち西側の壁アーチには扁平アーチが架かる扉口が開いている。身廊の天井は木組みであるので、横断アーチは見られない。身廊壁面は南北それぞれにおいて、2 つの壁アーチの間は途中まで（つまりアーチの起拱点まで）ピア（束ね柱）状となっていて、その上には水平のコーニスを介して細長い壁付き小円柱が立ち上がる。この円柱にはシンプルな植物彫刻が施された柱頭が付けられている。

身廊とトランセプトを隔てる壁には、合わせて 3 つのアーチが開いている。中央のものが最も大きくて主後陣とほぼ同じ幅があり、高さは主後陣の半ドームの頂部よりも高い。アーチは二重になっている。身廊から後陣に向かって右側のアーチは左側のそれよりもわずかに高さがあり、やはり二重になっている。左側のアーチは二重にはなっていないが、その上に少し小さめのニッチのアーチが重ねられて二段構えになっている。トランセプトの周辺、特に交差部を形作るピラストルやアーチに付けられたコーニス、そしてヴォールトに架けられたリブを受けるモディヨンなどには、さまざまな彫刻装飾が見られる。ビエットやパルメット、歯車文様、奇妙な形の動物、そしてアダム（横倒しになっている）とイヴなどで、これらはサン=ヴィクトール修道院を介したプロヴァンスの影響であると思われる。

主後陣は半円形で半ドームが架かる。中央には半円頭形の窓が開けられている。左右の小後陣は文字通り小さいもので、高さも低い。かつては半円頭形の窓が開けられていたが、現在は埋められている。外壁にはその痕跡さえ認められない。この小後陣にはそれぞれ古代の墓石が置かれており、小さな祭壇として使用されている。

なおサン=タマンすなわち聖アマンドゥスとして知られる人物は何人かいるが、その中でもとりわけ有名なのは 7 世紀にフランドル（今のベルギーあたり）でキリスト教の布教に努めたマーストリヒトのアマンドゥスであろう。しかしテジエのこの礼拝堂が捧げられているアマンドゥスはそれとは別の、5 世紀にボルドーの司教であった人物であるとされる。

Bibliographie：

Bardy et al.（1966）p.161; Clément（1993）pp.154-156; Germer-Durand（1868）p.244; Goiffon（1881）pp.375-376; Site officiel de la commune de Théziers（Histoire de Théziers）.

30.2.18　アラモン／サン=パンクラス教会（Église Saint-Pancrace, Aramon）

ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンとボーケールのおよそ中間あたりのローヌ川右岸に位置する。前者からは約 16 キロ、後者からは約 15 キロである。ケルト時代にはヴォルク=アレコミ

ク族の集落があり、さらにガロ=ローマ時代にはローヌの船着き場として重要な場所であった。マッシリア（マルセイユ）との関わりを示す遺物も見つかっている。この地方の主要都市はニームであったが、アラモンはユゼス周辺を構成する重要なオピダの 1 つであった。中世の前半期の歴史についてはあまりよく分からないが、11 世紀初めになってプサルモディ修道院のカルチュレールにその名（Aramonum）が現れる。村は 24 の領地に分割され、複数の共同領主がそれを支配した。トゥールーズ伯がアルビジョワ十字軍に屈服した 13 世紀以降は、その多くを国王が所有した。アラモンの城（かつてのカストルム）は、旧市街の北端の一段高くなった小丘の上に建つが、その主塔はフィリップ 4 世（在位 1285-1314 年）の時代のものである。現在もこの城は代々城主であるアラモン侯爵（marquis）家が所有している。

教区としては 18 世紀の大革命までユゼス司教の管轄下にあったが、16 世紀の宗教戦争期には、カトリックとプロテスタントがアラモンの村と教会を巡って争奪戦を繰り返した。同じ頃、幾度となくペストにも襲われている。中でも 1629 年のペスト禍が最も犠牲者が多く、アラモンのみならずこの地方では人口の 3 分の 2 が死んだと言われる。1551 年には国王アンリ 2 世の愛妾で知られるディアーヌ・ドゥ・ポワティエがアラモンの領主となり城も手に入れている。その後は目まぐるしく所有者が入れ替わった。

アラモンはローヌ川沿いにあるだけに、昔から幾度となく洪水の被害を受けてきた（ローヌの川筋は、現在よりも街に近かった）。冷害もたびたびこの地方を襲い、最近では 1956 年の冷害が深刻で、地元農業の中心でもあったオリーヴが壊滅的打撃を受けている。20 世紀初めにローヌ川に架けられた吊り橋は、第二次世界大戦中の 1944 年 8 月に爆撃によって破壊されたが、1971 年に再建されている。伝統的にオリーヴやブドウ栽培などが主要産業であったが、近年には街の郊外に大きな火力発電所や製薬企業の施設などが作られ、産業の近代化も進んでいる。

サン=パンクラス教会は、街の旧市街の南に建っている。サン=パンクラスすなわち聖パンクラティウスは、ディオクレティアヌス帝統治下のローマで 3 世紀終わりあるいは 4 世紀初め頃に、14 歳にして殉教したとされる。かつてガロ=ローマ時代に墓地があった場所に 11 世紀末から 12 世紀初め頃に内陣部分が建てられ、13 世紀に現在の主身廊の東側にあたる部分が建設された。したがって、主後陣、左右 2 つの小後陣、トランセプトと身廊の東側の 2 つのベイはロマネスク期のものである。1665 年から主身廊の北側に側廊および礼拝室が増築され、主身廊も西側に拡張された。E. Goiffon は、北側の側廊が 13 世紀にローヌの氾濫のためにアラモンに避難した Saint-Pierre-du-Terme（アラモンのすぐ北）の住民によって作られたものであるとするが、この側廊は 17 世紀のものであるというのが一般的な見方である。主身廊南側の 3 つの祭室も 17 世紀半ばのものである。1669

30.2.18
Saint-Pancrace d'Aramon

年には司祭 Gédéon de Faïn de Pérault によって西ファサードが現在の新しいものに作り替えられた。

この西ファサードの扉口は、半円形の頭頂部と組み合わされた三角形のペディメントが円柱の上に載り、内側が半円形のアーチと側柱に縁取られるという古典主義様式の豪華なものである。円柱の両側には方形のピラストルが並ぶ。左右の円柱とピラストルの間には小さなニッチがあり、それぞれ小彫像が置かれている。ただしこれはレプリカで、17 世紀のオリジナルは聖堂内の聖母被昇天の礼拝室に置かれている。西ファサードの左右両翼は扉口の開く中央部分に比べると装飾などもなく、壁面のみとなっているが、これは 18 世紀半ばまでこの部分に住居が直接に接して建っていたためである。1758 年にその住居は取り壊されたが、L. Valla によれば、1900 年頃になっても残された住居が邪魔をしてこのファサード全体を見通すことができなかったという。

聖堂北側の壁面には、教会広場に近いところに古代の墓碑が 2 つ埋め込まれており、この場所が古代には墓地であったことをうかがわせる。向かって左側の小さい方の墓碑は 1 世紀後半頃のもので、右側のそれよりも大きな墓碑は 1 世紀末から 2 世紀初め頃のものである。聖堂北壁の中央には半円頭形の大きなポーチがあり、その中に扉口がある。扉のすぐ上には司教代理（archidiacre）であった Gédéon de Fain de Pérault が亡くなった際に、街の紋章とリトル（葬祭の際に張り巡らせる黒い帯）が描かれた。そこには« Posuerunt me custode »との文字が読める。これは彼を「街の守護者」として讃えるものである。聖堂の南側は個人の住宅の敷地となっていて見ることができない。

サン=パンクラス教会の鐘塔は 2 つあって、西ファサードの上に立つ時計塔も兼ねた細長いものは 16 世紀後半に作られ、その後高さが加えられた。東側の内陣の上に立つ尖塔形のものはそれよりも古い。

聖堂内部は 17 世紀から 19 世紀にかけて行われた増築・改修工事によって、あまり古さは感じられない。3 ベイからなる主身廊と東西幅の狭い内陣（トランセプト）、そしてその東に半円形の後陣が続く。主身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。主身廊の北側はやはり 3 ベイからなる 17 世紀の側廊で、その東端の奥に続く礼拝室には天井に八角形の窓が開いている。主身廊の南側にはサン=ロックに捧げられたものなど礼拝室が 3 つ並んでいる。北側の側廊と南側の礼拝室の天井はすべて交差リブ・ヴォールトとなっている。

内陣および後陣はもともとは 12 世紀のものであるが、19 世紀に豪華な（あるいは少し過剰とも言える）彩色画が描かれ、見た目にはロマネスク期の雰囲気はほとんどない。後陣は半円形で、4 本の小円柱の上に 5 つの小アーチが連なるアーケードが付けられている。この後陣およびアーケードは、1851 年にその手前にあった仕切り壁を取り払った際に発見されたものである。しかしその時、アーケードを支える小円柱と柱頭はレプリカに置き換えられてしまった。小円柱はそれぞれ人面やサタン、鳥などの彫刻が施されたキュロ（小モディヨン）の上に立ち、また人物やアカンサスなどの柱頭彫刻と組紐模様の冠板を伴っているのであるが、これらもやはり 19 世紀に作り替えられたものである。

後陣の上には半ドームが架かる。青地に多数の小さな星が描かれているが、これはやはり 19

世紀のものである。半ドームの頂部には半円形の要石があり、そこから 3 本の平たいリブが放射状に広がっている。これはプロヴァンスの影響であるとも言われる。ラングドックではラマルー=レ=バン（エロー県）のサン=ピエール=ドゥ=レド教会（St-Pierre-de-Rhèdes）などにも見られるものである。アマロンでは祭壇が置かれた内陣を兼ねた交差部の東西幅が狭く、これもまたプロヴァンスの影響を感じさせるものである。交差部と主身廊の間に架かる横断アーチには、左右両側においてそれを受け止めるコリント式の美しい柱頭彫刻を伴った小円柱（床までは下りていない）が残されている。この小円柱は 1861 年の改修の「被害」を受けなかったものである。しかし 19 世紀の彩色画で覆われている。内陣と後陣の間の凱旋アーチ（勝利門アーチ）には、中央に神の子羊、そしてその左右に 2 人の天使が描かれている。ただしこれもまた 19 世紀のものである。

なおサン=パンクラス教会から通りをはさんですぐ北には、18 世紀に活躍した水理学者で建築技師でもあるアンリ・ピトー（Henri Pitot, 1695-1771）の生家がある。彼は 1740 年以降、ラングドックのいくつもの河川で防波堤工事を行い、ポン・デュ・ガールをはじめソミエール、ポン=サン=テスプリのローマ時代の橋の修復にも携わっている。またモンペリエのサン=クレマン水道を建設したのも彼であった。

Bibliographie：
CAG, 30/2, pp. 151−155; Clément (1993) pp.279−280; Germer-Durand (1868) p.9; Goiffon (1881) pp.19−21; Valla（1900）pp.249−299; Base Mérimée（Église paroissial d'Aramon）; GV, RIP.

30.2.19　モンフラン／ノートル=ダム・ドゥ・マルパ教会（Église Notre-Dame de Malpas, Montfrin）

モンフランは、ルムーランとボーケールのちょうど中間のガルドン川沿いにある小規模な街である。県道 D986L から D500 を東に入り、約 1 キロである。旧市街は碁盤目状の街区が広がり、そのすぐ東側の高台からはモンフランの城が街や教会を見下ろしている。

この地は 12 世紀から 14 世紀にかけて、テンプル騎士団が拠点の 1 つを置いていたことで知られる。そもそもは 1146 年、モンフランからガルドン川を渡ってすぐ西にあるメーヌの領主ポンス（Pons de Meynes）がテンプル騎士団員になるとともに、この騎士団に自らが所有するモンフランの土地などを寄進したことによる。また 1161 年には、ユゼス司教レーモン（Raymond／Raimond）がモンフランのカストルムのすぐ南にあったサン=マルタン=ドゥ=トレヴィル教会（Saint-Martin-de-Trévils）を騎士団に譲渡している。騎士団はしばらくはこの聖堂およびそれに隣接する場所に拠点を築いた。サン=マルタンは、その後しばらくの間はモンフランの教区教会でもあり、16 世紀にはペスト患者を収容する病院として使われたりしたが、宗教戦争の際に被害を受けた。さらにプロテスタント（ユグノー）によってモンフランの街に対する攻撃拠点とされるのを恐れて 1621 年に住民たちが取り壊したために現存しない。このサン=マルタンにあったとされる洗礼盤は現在のノートル=ダム・ドゥ・マルパ教会の堂内に置かれている。なお 1178 年には、モンフランのおよそ 500 メートル北東のサン=ポール・ドゥ・

モンタニャック教会（Saint-Paul de Montagnac）も騎士団に譲渡されているが、これもまた現存しない。

このようにモンフランにおいて相次いで寄進を受けた騎士団は、1166 年頃から 1180 年にかけて、このカストルムの中の、かつて異教の神殿があったとされる場所に新しい聖堂であるノートル=ダム・ドゥ・マルパ教会を、そしてそれに隣接する形で騎士団の拠点となるコマンドリーを建設した。このコマンドリーは、サン=ジルのコマンドリーに属し、1307 年にテンプル騎士団が壊滅した後は聖ヨハネ騎士団（病院騎士修道会。現在はマルタ騎士団）が引き継ぎ、1312 年から 1842 年までその拠点とした。モンフランのコマンドリーは今もノートル=ダム・ドゥ・マルパ教会の北に残っている。教会から約 40 メートルのところにある古典様式の門から中に入ると、中庭とそれを囲む塔や居館の様子を見ることができる。3 つある塔のうち北西端に立つ塔は方形の大きなもので、最上部にはメルロンが並んでいる。

ノートル=ダム・ドゥ・マルパ教会は、今も述べたように 1160 年代から 1180 年頃にかけてテンプル騎士団によって建設された。その場所はちょうどガルドン川に沿ってボーケールとルムーランを結ぶ街道が岩場によって隘路となっていたことから« Malpas »という名前が付けられたと言われる。後陣が平面形なのは、後陣のすぐ東側に岩場が迫っていたからである。14 世紀にゴシック様式の鐘塔と側室（礼拝室）が増築され、西側のヴォールトも架け替えられた。サン=マルタン=ドゥ=トレヴィル教会の後、モンフランの教区教会となりユゼス司教区に属した。1561 年、プロテスタント（ユグノー）によってヴォールトなどが破壊されるが、1595 年に修復工事が行われている。

西ファサードは、モンフランの街の東寄りのところを南北に貫くピエール・マンデス・フランス通り（D351）に面している。中央の扉口には、モールディングが幾つも重ねられた半円形のヴシュールが架かる。その様子はゴシックの到来を感じさせるものである。一番外側のアーキヴォルトは幅が広くなっており、その頂部には聖母マリアと思われる女性の小さな彫像が立てられている。ヴシュールの内側は半円形のタンパンで、そこに彫刻されているのは 12 世紀の「マギの礼拝」（Adoration des Mages）である。中央には聖母マリアが座っており左膝にイエスを載せている。イエスは左手に福音書を持ち、右手で祝福を与えている（ただしその右手自体は失われている）。聖母子の右側（こちらから向かって左側）には 3 人のマギ（いわゆる東方の三博士）が並び、それぞれ右手に捧げ物を掲げているが、その右手は衣服の袖で隠されている。一番手前のマギは膝を折って前にかがんでいる。一方、聖母子の左側には聖ヨセフ（マリアの夫）が座っている。空から天使が降りてきてヨセフに吹き流し（巻き物）を渡しながら、聖母子と共にエジプトに逃れるよう命じている。聖母子やマギ、そして天使の顔は残念なことにすべて破壊さ

30.2.19　Notre-Dame de Malpas

れてしまっているが、その衣服のひだがしなやかにカーヴを描いて幾重にも重なる様子は、誠に印象的であると言えよう。

このタンパン彫刻は、サン=ジルの西ファサード北側の扉口に見られる「マギの礼拝」とその構図がよく似ており、サン=ジルの（言い換えればプロヴァンスの）直接的な影響が認められる。そもそもモンフランのコマンドリーはサン=ジルのそれに属していたため、このタンパンの制作者も同一であったのではないかとも考えられる。なおこの聖堂には北東にもう 1 つ扉口があり、現在は聖具室となっていて外からは見えないが、そのタンパン部分にも聖母マリアの彫刻が見られる。

西ファサード扉口のタンパンのすぐ下には大葉様の植物文様（図形的なアカンサス）の組石が並び、これはヴシュールを受けるインポストを経て、さらにファサードの左右に向けて、歯車装飾を伴って水平に連続している。インポストの下のピエドロワ（迫台方形柱）にはかつては左右に 2 本ずつ円柱が置かれていたが、現在は失われている。扉口の上には半円頭形の窓が 2 つと、さらにその上の中央に大きな丸窓が開けられている。この丸窓は、一番外側を歯車形のモールディングに縁取られており、さらにその内側には十字形の花弁が連なるフリーズが付けられている。丸窓の外側のモールディングの頂部には、逆立ちした天使のような彫刻が残されているが、傷みが進んでいることもあって、それが何なのか正確なところは判然としない。

西ファサードの上部は三角形の切妻となっていて、屋根との境目に巡るコーニスにはさまざまな彫刻が施されたモディヨンが並ぶ。植物の葉、羽を広げた鳥、人間の顔、獣たち、鳥のような生き物を捕まえる人、人間の顔を持つ鳥など。これらにもサン=ジル（中央のタンパンの左右に並ぶモディヨン）からの影響が認められるという。P. A. Clément はラ・シェーズ・デューなどオーヴェルニュからの影響も指摘している。モディヨンの並ぶこのコーニスは、モンフランでは聖堂の南北の壁面上部にも続いており、そこにもさまざまなモディヨン彫刻が並んでいるが、とりわけ南側の壁面の東から 4 つ目のものが注目される。前方をしっかりと見据えながら手の甲をこちら側に見せる形で両手を左右にかかげた人物である。いわゆるオランス（オラント／祈る人）であると思われるが、まるで地球を支えるかのように聖堂の屋根を支えるアトラスのようにも見えなくはない。よく似たポーズの彫刻は、やはりサン=ジルの地下クリプトの祭室の 1 つにおいて交差リブを受け止めるキュ・ド・ランプ（モディヨン）に見ることができる。

30.2.19　Notre-Dame de Malpas

聖堂の北西に立つ鐘塔は 14 世紀ゴシック期のもの。この鐘塔の土台部分は方形であるが、上部は八角形である。方形の部分には北と南の面に半円頭形のベイが 2 つ、そして東と西の面にそれが 1 つずつ開けられている。そのすぐ上の段には各面にクロケット装飾が連なる三角形のモールディングに縁取られたゴシック様式のベイが 1 つずつ開く。一

番上の頭頂部はやはりクロケット装飾が並ぶ尖塔となっている。高さは尖塔も含めて 40 メートルある。鐘塔の北面の壁には、半分の高さの所まで断面の形が三角形となった扶壁が 2 つ付けられている。その扶壁のすぐ上のところにエキュソン（écusson）が 2 つ見える。向かって右側のものは十字架が彫刻された聖ヨハネ騎士団の紋章で、左側のものは 14 世紀後半にこの騎士団においてサン=ジルを管轄する管区長（grand prieur）であった Ferdinand de Heredia のものである。

聖堂内部は 3 ベイからなる単身廊形式で、南北幅 11 メートルあまり、東西の長さは 25 メートルである。各ベイの天井は水平のコーニスの上に交差リブ・ヴォールトが架けられているが、西側の 2 つのベイのヴォールトは、宗教戦争の際 1561 年に部分的に破壊された後に再建されたものである（横断アーチに 1595 年という刻印が見られる）。一番東の第 3 ベイのヴォールトのみが 12 世紀のオリジナルである。このヴォールトの交差リブは、サン=ジルの地下クリプトのそれと比較しうるとされ、サン=ジルのクリプトの直後くらいに作られたものと考えられている。ガール県に現存するロマネスク期の聖堂で、天井が交差リブ・ヴォールトとなっているのはここだけであるとされ、これは南フランスのこの地域において、最初のゴシックの到来を告げるものの 1 つであると言えよう。交差リブの要石は摩耗していてその形はよく分からないが、年代は 12 世紀のものである。なお西端のベイのリブの要石はモンフランの街の紋章で、パルメットとクリスムが付けられている。また中央のベイのそれは聖ヨハネ騎士団長の紋章となっている。

3 つのベイは 2 つの横断アーチによって区切られているが、そのうち西側の横断アーチを受け止める方形のピラストルの柱頭は、北側が「アブラハムの犠牲」（sacrifice d'Abraham）で、これはアルル・サン=トロフィームのクロワトル北側の柱頭から影響を受けているとも言われる。また南側のものは聖堂の献堂式か何かの典礼の様子を表現したもので、二人の従者にはさまれて中央に司教が立っている（ミトラをかぶり、司教杖を持っている）。柱頭横面には香を焚く従者の姿も見られる。東側ピラストルの南北 2 つの柱頭はパルメットとワシである。P. A. Clément によれば、ボーケールのノートル=ダム=デ=ポミエ教会（Notre-Dame-des-Pommiers）の鐘塔東面にあるフリーズのものと似ているという。身廊に見られるこれらの柱頭彫刻はすべて 12 世紀のものであるが、その作り手は西ファサードのタンパン彫刻のそれとは異なると思われる。

身廊の南側には 14 世紀の側室が 2 つ並んでいる。東側のものは聖レダンプタ（sainte Rédempta）の礼拝室、その隣は聖母の礼拝室で、ともに交差リブ・ヴォールトが架けられている。身廊北側の各ベイには半円形の壁アーチが並ぶが、西端のベイにはトリビューンが作られ、そこには尖頭形のアーチが開けられて（ただしかつての半円形の壁アーチの痕跡は認められる）、鐘塔の下にある礼拝室に通じている。その礼拝室もゴシック様式で、天井は交差リブ・ヴォールトである。

身廊の東端のベイは平面形の内陣となっていて、3 つの祭壇が並んでいる。中央のものはひときわ大きくて、19 世紀の「聖母の昇天」の絵画が飾られている。上には弓形ペディメントが載る。その左右の小さめな祭壇は三角形のペディメント仕様となっている。それぞれにはやは

り絵画が飾られており、向かって左側のものは制作者不詳の「聖ヨセフ」、右側はやはり制作者不詳の「聖ロックと聖セバスティアン」で、ともに 17 世紀のものである。

なおモンフランの街の東の高台の上にある城は中世には軍事的な城塞であったが、17 世紀から 18 世紀にかけて城主であった Monteynard 家によってルイ 14 世紀様式の城館に変えられた。大革命の際にかなり荒らされるが、建物自体は破壊を免れて軍病院として使用されるなどした。その後は一時的に Monteynard 家のものに戻り、さらにその後 Schreiber 家が購入して現在に至っている。私有の館であるために、通常は訪問できない。

Bibliographie：
Buholzer（1962）pp.136–137; Carraz et Aspord-Mercier（2010）pp.297–315; Clément（1993）pp.245–247; Germer-Durand（1868）p.141; Goiffon（1881）pp.181–183; Mougneau（1991）pp.76–129; Moreau（1997）pp.139–141; Nougaret et Saint-Jean（1975）p.36; Pérouse de Montclos（1996）p.297; Trenquier（1847）pp.16–22, pp.33–59; Site officiel de la commune de Montfrin; Base Mérimée（Église Notre-Dame de Montfrin）; RIP.

30.2.20a　ロクモール／トゥリュエルのサン=ソヴール礼拝堂
（Chapelle Saint-Sauveur de Truel, Roquemaure）

ロクモールはローヌ川沿いにあって、ガール県最東端に位置するコミューンの 1 つである。ローヌの対岸にはシャトーヌフ=デュ=パープ、さらにその 10 キロ北にはオランジュがある。古くからローヌおよびそれに沿ってリヨン、ヴイエンヌ、アルバからプロヴァンスやラングドックに向かう街道の中継地点であった。

中世にはロッカ・マウラ（Rocca Maura）と呼ばれていた。11 世紀半ばにローヌ河岸の岩盤の上に城塞が建設され、それが軍事的な役割を果たすとともに、ローヌを行き来する船舶から通行税を徴収するための関所（péage）としても機能した。13 世紀初め、ラングドックで拡大していた異端カタリ派対策のために、教皇インノケンティウス 3 世は特使ピエール・ド・カステルノーを送るが、彼はアルル近くで暗殺された（1208 年）。教皇はその事件に責任があるとしてトゥールーズ伯レーモン 6 世を破門しようとし、さらにフランス国王フィリップ 2 世（オーギュスト）にアルビジョワ十字軍の派遣を働きかけた。レーモン 6 世は 1209 年にサン=ジルにおいて教会に恭順を誓い、その証として近隣の 9 つの城を教皇に割譲した。ロクモール（ロッカ・マウラ）の城はそのうちの 1 つであった。ほどなくこの城はアヴィニヨン司教の支配下に置かれたが、トゥールーズ伯レーモン 7 世がアルビジョワ十字軍に敗北した結果、1229 年のパリ条約によって、

30.2.20a　Château de Roquemaure

国王ルイ 9 世（サン=ルイ）に譲渡された。その後、この城は国王の派遣するボーケールとニームのセネシャルが支配することとなり、城壁や内部の建物が再整備されるとともに、王国の守備兵が置かれた。

1314 年 4 月 20 日、病に冒された最初のアヴィニヨンの教皇クレメンス 5 世は、生まれ故郷のアキテーヌ（ギエンヌ）に帰ろうとしてロクモールまで来てこの城で亡くなった。遺骸が収められた棺の上にあったロウソクが倒れてその棺を燃やし、彼の遺骸も焼けただれたが、これは彼が火刑に処したテンプル騎士団員の呪いであるとも言われた（この騎士団解体の首謀者であった国王フィリップ 4 世も奇しくも同じ年に亡くなっている）。1367 年にはアンジュー公ルイ 1 世（Louis d'Anjou／国王シャルル 5 世の弟）が、1389 年には国王シャルル 6 世、1420 年には王太子シャルル（後の国王シャルル 7 世）などがこの城に滞在している。

宗教戦争期にはアドレ男爵などのプロテスタント勢力が幾度もロクモールを襲撃・占拠するが、1590 年にはラングドック総督であったアンリ・ドゥ・モンモランシー（アンヌ・ドゥ・モンモランシーの子）がロクモールを奪回するべく包囲し、その包囲戦において城の南側の城壁や塔が破壊された。17 世紀には城はもっぱら監獄として使用されていたが、その世紀の後半になると城の南側の堀が埋められて市街地と接続し、軍事的な役割を終えた。フランス革命の後は国有財産として売却され、石切り場と化してしまった。それ以降 19 世紀まで取り壊しが進み、現在この城の遺構として残るのは、かつては 7 つあった塔のうちの高さのある方形塔（tour carrée）と、城を取り囲む城壁（東側）の一部であった円塔（tour ronde）、そして河川通行税徴収のための建物（maison des péagers）の北面の壁のみである。城内には、パリのサント=シャペルに模したゴシック様式の小さな礼拝堂が、方形塔と円塔の間にあたりに建てられていた。その礼拝堂は、1229 年にこの城がルイ 9 世のものとなってから程なくしてセネシャルによって建設されたと考えられている。内部にはフレスコ画が描かれていたと言われるが、すでに取り壊されて跡形もなく、その場所は現在の敷地所有者の駐車場になっている。

ロクモールの街には、14 世紀のコレジアル教会（Collégiale Saint-Jean-Baptiste-et-Saint-Jean-l'Évangéliste）がある。教皇ヨハネス 22 世の甥で枢機卿の Bertrand de Pouget によって 1329 年から 1335 年にかけて建てられ、1345 年に聖堂参事会のコレジアルとなった。大きな三角形の切妻形の西ファサードが印象的である。中央の大きな丸窓の下に方形のポーチが付き、その中の大きな四重のアーキヴォルト（尖頭形）の下に縦長の扉口が開いている。堂内のその扉口の上には 17 世紀後半の見事なパイプオルガンが据えられている。もとはアヴィニヨンの女子修道院のものであったが、大革命後にロクモールのコレジアルに移された。聖堂内部は交差リブ・ヴォールトが架かる主身廊とその両側に側廊が付き、側廊の各ベイにはさらに小礼拝室が並んでいる。コレジアルの南« Rue du Chapitre »の 18 番地には、かつての参事会員の居館が残されている。その南側の通りに回ると、その居館の中庭と建物に付けられた階段塔を見ることができる。

ロマネスク聖堂であるトゥリュエルのサン=ソヴール礼拝堂へは、ロクモールから県道 D976 を南へ約 1 キロ進み、« Chemin de Truel »に入る（そのままその県道を 300 メートル行くと、もともとはロマネスク期に建てられたが 17 世紀末から 18 世紀初めにかけて建て替えられた小

さなサン=ジョゼフ礼拝堂がある）。さらに1.5 キロほど南に行くとトゥリュエルの集落となる。サン=ソヴール礼拝堂は、十字架が立つ交差点のすぐ先である。この場所にはかつてはガロ=ローマ時代のウィラがあった。« Truel »の名はもとはこのウィラにあったブドウやオリーヴの圧搾機（pressoir）を意味する« torculum »に由来し、10 世紀になってこの場所にヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ修道院によって創建されたプリウレ（小修道院）の名前も、それにちなんだものであった。12 世紀にはテンプル騎士団がここを彼らのコマンドリーの 1 つとして使用したとも言われる。中世の間に要塞化され、建物の高さが加えられている。大革命後は荒廃するばかりであったが、1970 年代になってソヴテールの村長でもあったマクシム・タルデュー（Maxim Tardieu）がここを入手し修復・整備して一般に公開した。

30.2.20a　Saint-Sauveur de Truel

最初の建設は 11 世紀にまでさかのぼると見られている。基本プランはラテン十字形であるが、トランセプトは非常に小さい。中世の要塞化によって 2 階建てとなっていて高さがある。聖堂の南側は直接住宅が建てられているので壁面は見ることができないが、北側の壁面を見ると、上半分の建て増しされた部分の石積みと下半分の石積みの様子の違いが見て取れる。扶壁は付けられていない。この北壁にはごく小さな四角い開口部が 1 つだけ見られるが、それ以外に窓などはない。下の方に、かつて開けられていた出入口の痕跡が残されている。屋根の下にはモディヨンが並んでいる。身廊部のモディヨンは無装飾であるが、後陣部では俵状の形になっている。西ファサードには、1 階部分に半円形のヴシュールと一枚岩のリンテルを持つ方形の扉口が開く。このヴシュールの最頂部のクラヴォーには、摩耗しているがキリストと思われる人物が彫刻されている。またその少し左右の石にはそれぞれワシのような鳥の彫刻が見られる。2 階部分には半円頭形で縦長の大きな窓が開けられている。切妻屋根の上には半ば台形になった鐘楼が立つ。後陣は身廊部より低く、形は五角形である。最東面に半円頭形の小さな窓が開いている。

内部は 2 ベイからなる身廊に幅の狭いトランセプトが続き、東端は外部は五角形であるが内部は半円形となった後陣となっている。南北のトランセプトにも小さいながら小後陣が付き、それぞれ小さな窓が開けられている。主後陣には内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられており、その上に半ドームが架かる。またこの主後陣には、左右両側が石の脚で支えられた祭壇が置かれている。身廊の天井は各ベイがゴシック様式の 4 分交差リブ・ヴォールトとなっている。身廊東側のベイには南側に、隣接する住居に通じる石段と出入口が作られている。先にも触れたマクシム・タルデューの修復以降、礼拝堂内部（少なくとも 1 階部分）はきれいに保存されており、現在はコンサートなどの文化イベントにも利用されている。

Bibliographie：
Bardy et al.（1966）p.136; Barruol et al.（2001）p.238; Chantal（2003）pp.115-139; Clément（1993）p.92; Clément（2001）p.238; Eydoux（1978）pp.327-334; Moreau（1997）p.168.

30.2.20b　ロクモール／サン=タグリコル・ダルバレ礼拝堂（Chapelle Saint-Agricol d'Albaret, Roquemaure）遺構

サン=タグリコル・ダルバレ礼拝堂は、ロクモールのコミューン域の西端に位置し、高速道路A9のロクモールの出口（22）のすぐ南にある。県道D976とD6580が交わる大きなロータリーから北西方向に畑の中の農道を約200メートル歩くか、自動車であればそのロータリーからD976を西へ約600メートル行ったところで北に折れ、高速道路を越えるすぐ手前で東に向かう側道を約500メートル進むと礼拝堂に至る。高速道路沿いにあるので、そこを走る自動車の中からも見えるが、リヨン方面から南へ向かうTGV（高速鉄道）の車窓からも、一瞬のことではあるがその姿を見ることができる。

聖アグリコル（アグリコラ）は7世紀のアヴィニヨンの司教で守護聖人でもある。この礼拝堂は別名クラリー礼拝堂（Chapelle de Clary）とも呼ばれる。建設はおおよそ12世紀後半のこととされるが、最も古くて10世紀にまでさかのぼるとの見方もある。ここにあったプリウレ（小修道院）は、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ修道院の分院であった。1989年に礼拝堂の南東に接する形で墓地が発掘されており（墓の数は22）、中世期にこの近くにあった小さな集落（Albareto）のものと考えられる。現在残る建物の遺構のうち、ロマネスク期のものは身廊の東のベイと後陣の部分で、その西側（身廊の残りの部分と西ファサード）はもっと後の時代、おそらくは17世紀前半に増築されたものである（屋根は失われている）。中央に半円頭形の細長い窓が開く半円形の後陣（高さ4メートル弱）は、切り整えられた中石材がきれいに積まれたもので、その西側の短い身廊部分も同様の仕様である。またその身廊には南北に大きな扶壁が残されている。この扶壁にはかつてそこに付けられていた壁アーチの起拱部分の一部が見られる。身廊の上部（後陣より上の切妻および南北の側壁の上）は、不整形の石の乱積みで、これは古い身廊の西側に建て増しされた建物の壁も同じなので、その部分と東側の身廊の上の再建が同時に行われたのであろう。後陣の上の凱旋アーチの壁面には方形の小さな窓が開けられている。古い身廊部分の西にあたる位置には、小さくて繊細な鐘楼が立っている。

30.2.20b　Saint-Agricol d'Albaret

礼拝堂西側の新しい部分には南側に聖具室（あるいは司祭の居室）であったと思われる方形の側室が付いている。窓などはなく、その部屋には東側から出入りするようにな

っていたようである。西ファサードは方形の扉口、そのすぐ上に半円頭形の小さなニッチ（かつてはそこに聖母子像の類いが置かれていた）、そして一番上に丸窓が続く。屋根は切妻である。礼拝堂内部は、残された身廊の横断アーチ（尖頭形）の高さに比べると南北幅が狭く感じられる。後陣の中央には内部に向けて隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が開く。また後陣中央つまり内陣には石の祭壇が置かれている。身廊の南北の壁面、凱旋アーチ部分、そして後陣の二重のコーニスの上に架かる半ドームには、保存状態は決して良くはないが茶色や青色で植物文様や渦巻きなどのフレスコ画が描かれている。後陣の半ドームには 4 本のリブが描かれている。これらの壁画も 17 世紀のものである。18 世紀に入ってもこの礼拝堂は聖アグリコルやその父でやはりアヴィニヨン司教であった聖マグヌス（saint Magne）の聖遺物を奉じ、近隣の信者が集まっていたという。大革命の後、1792 年にいったん国有財産として売却されたが、1802 年のコンコルダート（政教条約）を受けてロクモールの教会財産管理委員会が入手し、19 世紀終わり頃までは年に一度ミサが執り行われるなどしていた。しかしその後は打ち捨てられて荒廃が進み、現在の状況に至っている。

Bibliographie：

Breton（2001）pp.333-336; Clément（1993）p.95; Clément（2001）p.238.

30.2.21　ピュジョー／サン=ヴェレデーム礼拝堂（Chapelle Saint-Vérédème, Pujaut）

ピュジョーのコミューンは、ロクモールから県道 D980 と D642 で南へおよそ 8 キロ、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンからは D177 を北へ 6 キロである。サン=ヴェレデーム礼拝堂はコミューンの村役場から北へ 1 キロの D642 沿いに建っている（県道からは 30 メートル東へ入る）。

聖ヴェレデーム（ヴェレデムス）は 7 世紀前半のアヴィニヨン司教で、司教になる前はこの地の隠修士であった。礼拝堂はヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ修道院傘下のプリウレ（小修道院）のもので、10-11 世紀前半の初期ロマネスク建築である。平面プランはトランセプトを持たないシンプルな単身廊タイプで、方形の身廊の東側に 3 つの面からなる台形状の（しかも外側への出張りが少ない）後陣が付く。多角形の後陣の場合、南フランスでは通常その形は五角形となることが多いが、これは珍しい形である。しかもこの後陣には開口部が見られない。後陣の北東角の土台に残された石積みは 8 世紀のカロリング期にさかのぼるもので、この礼拝堂建設以前のガロ=ローマ時代の建築物の名残である可能性もある。

30.2.21　Saint-Vérédème de Pujaut

身廊部の壁面は中石材の平積みで、扶壁を持たない。北壁には窓などの開口部はまった

くない。南側の壁には 14 世紀に改修の手が加えられ、大きさの異なるゴシック様式の窓が 2 つ開けられている。2 つとも窓枠は尖頭形で、円形文様のトレーサリーが施された美しいものである。東側の大きな窓のすぐ下には、これもまたゴシック様式の出入口があるが、現在は埋められている。西ファサードは、ロマネスク期の半円形アーチ（アーキヴォルト）の中に新たに方形の出入口が開けられている。上部の切妻の中央には外部に向けて隅切りされた半円頭形の美しい窓が開けられている。その枠組みは整形された大石材がきっちりと組まれたもので、周囲の石積みよりも後の 12 世紀以降の盛期ロマネスク様式のものであろう。西ファサードの向かって右側（南側）には、14 世紀に方形の鐘塔が増築されており、その内部には螺旋階段が付けられている。

礼拝堂内部は 2 ベイからなる（ただし横断アーチはない）。身廊の各ベイの側壁には半円形で高さのある壁アーチが並ぶ。アーチの両端はピラストルとなって床まで降りている。南側の壁アーチに開けられた 2 つの窓は、内部に向けて隅切りされており、半円頭形のロマネスク様式である（ただし外側はゴシック様式）。身廊の天井は、現在は三角形（切妻）の木造となっている。特徴的なのはやはり後陣で、二重に重なる半円形の凱旋アーチ（外側のものがより古い。起拱点にはともにインポストが付けられている）の東側にあって、その平面プランは外部と同じく 3 面からなる台形状である。窓は開けられていないが、小さなニッチや小穴がいくつか見られる。凱旋アーチの上には、中心線から少し北側にずれたところに小さな方形の窓が開けられている。

この礼拝堂は個人所有であったが、1998 年にピュジョーのコミューンが買い取り、2000 年代に入って修復工事が行われてきた。その際に床下から墓が 2 つと、穀物などを貯蔵するための小さな穴倉が 5 つ見つかっている。この穴倉は中世のものとされ、このサン=ヴェレデーム礼拝堂がプリウレの聖堂であると同時に、修道士たちのための穀物倉庫としての役割も果たしていたことをうかがわせる。現在は、ガラスの床パネルを通してこれらの穴倉の様子を見ることができるようになっている。

Bibliographie：
Clément (1993) pp.92-93; Clément (2001) p.237; Mouzin (1898) p.303; Pesenti (2008) pp.222-223; RIP.

30.2.22　ソヴテール／ノートル=ダム=デ=フール旧教区教会
(Ancienne église paroissiale Notre-Dame-des-Fours, Sauveterre)

しばしばノートル=ダム=ドゥ=フール（Notre-Dame-de-Four）と単数形で表記される。ソヴテールのコミューン域の南寄りにあり、村役場からは県道 D980 を南へ 2 キロ、またピュジョーからは県道 D242（Rue de Four）を東へ 2.7 キロ行ったフールの集落のほぼ中央に位置する。聖堂自体は私有地の中にあって個人の住宅に囲まれていてアクセスできない。

もともとこの地には古代にアンフォラなどを焼く製陶所があった（Four=焼窯）。古代の墓所もあり、フールの修道院と付属のノートル=ダム教会はその跡地に建てられた。最初の記録

30.2.22 Notre-Dame-des-Fours

は、アヴィニヨンの司教フルク（Foulque）が、同じくアヴィニヨンの司教座聖堂参事会にこのフールの聖堂を与えることを記録した 916 年の文書である。さらに 1120 年、アヴィニヨンの聖堂参事会は、フールの聖堂をサン=タンドレ修道院がアヴィニヨンに持っていたサン=ジュリアン教会と交換した。1143 年に教皇インノケンティウス 2 世が、また 1178 年にはアレクサンドル 3 世が、それぞれサン=タンドレ修道院の所有を確認している。1239 年、マビーユ・ダルバロン（Mabille d'Albaron）という名の貴族の婦人がサン=タンドレ修道院からここを手に入れ、女子修道院（couvent）を作るとともにその修道院長となった。この女子修道院は引き続きサン=タンドレ修道院の傘下にとどまったが、ほどなく彼女は亡くなってしまう（この女性の事蹟を記した大理石の碑銘板が聖堂の西壁に埋め込まれている）。フールの修道院はその後もベネディクト派修道院として 14 世紀まで存続するが、治安上の問題もあり、1363 年になってアヴィニヨン司教アングリック・グリモアール（Anglic Grimoard）が修道女たちをアヴィニヨンの街の中に移した。フールの修道院自体はヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのシャルトルーズ修道院の所有となった。大革命の後は農家の所有となり、修道院の建物は取り壊され、聖堂は厩舎や納屋、穀物倉庫として使用された。

現在の教会の建物は、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ修道院傘下であった 12 世紀後半のものである。西ファサードは南西方向に、また後陣は北東方向に向いている。身廊部の両側には民家が直接増築されている。西ファサードはゴシック様式で、上部に尖頭形の大きな窓が 2 つ並び、そのすぐ上にこれもまた大きな丸窓が開けられている。一方後陣は五角形で、中央に半円頭形の細長い窓が開けられ、その上の凱旋アーチの壁には縦長の窓が開けられている。切妻の上には頂部が三角形になった小さな鐘楼が立つ。扉口は身廊部南側にある。二重のヴシュールと側柱に囲まれて、半円頭形の木製の扉が付いている。ただしこのヴシュールと側柱は 12 世紀のオリジナルのものではない。その上に開けられている隅切りされた半円頭形の窓はロマネスク様式で 12 世紀のものである。

内部は 3 ベイからなる単身廊形式で、その東には二重になった半円形の凱旋アーチと後陣（内陣）が続く。身廊の天井は、水平のコーニスの上に半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる。床からヴォールトの頂部まではかなり高さがある。後陣は外部では五角形であったが内部は半円形となっている。水平のコーニスが巡り、その上に半ドームが架かる。後陣中央には水平のコーニスのすぐ下に細長い窓が開いている。身廊の側壁の壁アーチは二重になっていて、産地が異なる色違いの組石から作られている。身廊の最も東のベイの北側には祭室がある。聖堂内部は 12 世紀ロマネスク期の雰囲気をよく残しており、一般公開されていないのが残念である。

Bibliographie：

Clément（1993）pp.93-95; Clément（2001）p.239; Granièrer et Granier（1982）pp.373-379;

RIP.

30.2.23　タヴェル／旧モンテザルグ小修道院
（Ancienne prieuré de Montézargues, Tavel）遺構

タヴェルはロクモールから南へ 10 キロ、ルムーランからは北へ 17 キロ、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンからは西へ約 12 キロである。品質の良いロゼ・ワインの生産地として知られる。モンテザルグ旧小修道院へは、サン=フェレオル教会（またはサン=ピエール教会、18 世紀）があるコミューンの中心から県道 D4 を東へ 700 メートルで南に向かう D26 に入る。約 1 キロで D976 と交差するのでそれを越えて細い« Chemin des Prés »を 500 メートル進むと« Montézargues »という小さな標識が現れる。そこを南に折れて 600 メートル行くと、高さ 100 メートルあまりの小丘の東側にかつて小修道院であった建物が残っている。グランモン修道院（リムーザン）傘下の分院として 12 世紀末の 1199 年に創建された。土地はここの領主でもあったサブラン家のギヨームから提供され、アヴィニヨン司教（ロスタグヌス 3 世または 4 世）からプリウレ建設の許可を得た。修道会則は、グランモン修道院の創建者である聖エティエンヌ（saint Étienne de Muret／または聖ステファヌス）のものが採用された。修道士たちはこのプリウレが所有するブドウ畑でワインの生産も行っていた。しかし 13 世紀後半には修道士の数も減って衰退に向かったため、14 世紀にはモンペリエ郊外にあったモントベルー小修道院（Prieuré de Montaubérou）に吸収され 18 世紀後半まで存続した。

かつてのモンテザルグ小修道院の建物は、現在はワイン生産のドメーヌが所有し、その敷地内のほぼ中央で工場として使用されている。敷地の北側からアクセスすると、東西に延びる建物の北側の壁に、古い壁面がそのまま残されているのが見える。12 世紀末-13 世紀初め頃のもので、不整形の石が乱積みされ、ロマネスク様式の半円頭形の窓が並ぶが、すべて石で塞がれている。壁面の最上部は細長い石がジグザグに組まれたいわゆるヘリンボーン様式（opus spicatum）となっている。

30.2.23　Prieuré de Montézargues

Bibliographie：
Clément（1993）pp.238-239; Durand-Sendrail（1995）pp.5-34.

30.2.24a　ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨン／サン=タンドレ修道院付属サン=マルタン教会
（Église Saint-Martin, Abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon）遺構

ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンは、ローヌ川をはさんでアヴィニヨンのちょうど対岸に位置する。台形状の小山であるアンダオン山（Mont Andaon）は川から約 70 メートルの高さがあり、もともとはローヌ川に囲まれた島のような場所であった。この山にはケルト時代から人が

住んでいたが、その数はさほど多くはなかった。5-6 世紀頃から墓地の数が増え、その中にカザリーという名の女性の墓があった。彼女はもとは西ゴートの王族の娘であったとも言われ、この山の洞窟の中で隠棲生活を送っていたが、586 年（または 587 年）に亡くなった。アヴィニヨン司教のヴァレウス（Valeus／Valens）がこの山に葬ると、その後彼女が隠棲していた洞窟や墓は崇敬の対象となって多くの巡礼が訪れるようになった。10 世紀になると、やはり彼女を崇敬するベネディクト派の修道士たちがこの地に共同体を作り、980 年にはそれがサン=タンドレ修道院の創建につながった。982 年、アヴィニヨン司教ガルニエ（Garnier または Vernerius）が土地を与えるなどしてその活動を援助し、999 年 1 月には教皇グレゴリウス 5 世により正式に修道院として認可された。なおサン=タンドレすなわち聖アンデレは、キリストの十二使徒の一人で、1 世紀後半にギリシアのアカイアにおいて斜めに交差するX形の十字架につけられて殉教したとされる聖人である。フランスでもこの聖人の名を持つコミューンや聖堂は少なくない。

11 世紀初め、教皇ヨハネス 19 世の後押しもあって、ローヌ川左岸でアヴィニヨンの東およそ 18 キロのトゥゾン（Thouzon）に分院が作られ、それ以降サン=タンドレ修道院の拡大が続いてゆく。また同じ頃から、このアンダオン山の上には修道院に隣接して集落（ブール／bourg Saint-André）が形成された。1088 年、この地域の大封建領主であったトゥールーズ伯レーモン 4 世サン=ジル（Raymond IV de Saint-Gilles）がサン=タンドレ修道院による土地と財産（アンダオン山のブールや近隣のレ・ザングル Les Angles を含む）の所有、そして本院およびトゥゾン修道院に対する免税を認めた。1096 年には教皇ウルバヌス 2 世がサン=タンドレ修道院に立ち寄り、サン=タンドレ修道院と分院の保護をあらためて確認している。12 世紀に入ると、サン=タンドレ修道院はローヌ川の両岸に、合わせて 80 もの分院を保有するに至り、1130 年には教皇インノケンティウス 2 世が教書の中でそれを確認している。

13 世紀を迎える頃には、ローヌ川対岸のアヴィニヨンがサン=タンドレ修道院と隣接するブールに対する支配の強化を目論んだ。1210 年、トゥールーズ伯レーモン 5 世はそれを認め、さらに 1222 年、トゥールーズ伯レーモン 7 世がアヴィニヨンとの間で協約を結ぶことによって、サン=タンドレ修道院とその分院はアヴィニヨンの市参事会の管轄下に入れられた。しかし事態はアルビジョワ十字軍によって大きく変化することになる。1226 年、アルビジョワ十字軍を主導する国王ルイ 8 世（在位 1223-1226 年）の軍がトゥールーズ伯に忠実なアヴィニヨンを攻囲し、国王はアンダオン山のサン=タンドレ修道院に滞在した。その際に同修道院長ベルトラン・ドゥ・クロソンヌ（Bertrand de Clausonne）は、ルイ 8 世と協約（paréage）を結び、サン=タンドレ修道院はその所領を国王との間で分割・共有するという条件でアヴィニヨンの影響下から脱

30.2.24a　Villeneuve-lès-Avignon

して国王の庇護の元に入った。1292 年、国王フィリップ 4 世（ル・ベル／在位 1285–1314 年）がこの協約を再確認している。同時にフィリップ 4 世は、ローヌ右岸の支配権を強化するとともに、法的には神聖ローマ帝国の支配下にあり、ナポリ王シャルル・ダンジューの領地でもあったローヌ対岸に対するにらみをきかせるためにアンダオン山の要塞化を決定（これは後にアヴィニヨンの教皇庁に対する押さえともなった）、さらにこの山の麓に新たに新街区ーすなわちヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンの街ーの建設を始めた。フランス国王がこの新街区の共同領主であることはフランス大革命まで続くことになる。アヴィニヨンとの間を結ぶベネゼ橋の西側の渡り口に、大きな方形の「フィリップ美麗王の塔」（Tour Philippe-le-Bel）が建設されたのは 1293 年から 1307 年にかけてのことで（この塔の 3 階部分は 14 世紀、一番上の見張り塔は 15 世紀）、それに引き続いてサン=タンドレ要塞の本格的な建設は、ジャン善良王（在位 1350–1364 年）からシャルル 5 世（在位 1364–1380 年）の代にかけてのことであった（1372 年頃とも言われる）。

サン=タンドレ修道院の最盛期は 13–14 世紀で、ラングドックとプロヴァンスに 200 以上の分院を持った。本院だけで修道士の数は 90 人以上を数えたという。1307 年の記録では立派な図書館も備えていた。そんな中、1305 年に対岸のアヴィニヨンに教皇庁がやって来た。教皇や枢機卿などは競ってヴィルヌーヴにも館を建てるようになり、この街はアヴィニヨンの別荘地となった。こうしたアヴィニョンの高位聖職者の館は「リヴレ」（livrée）と呼ばれ、14 世紀半ばには 12 もの館を数えた。中でも教皇ヨハネス 22 世の甥で枢機卿のアルノー・ドゥ・ヴィア（Arnaud de Via）が建てた館では、1333 年にその中にあった礼拝堂のための聖堂参事会が創設され、この礼拝堂は後にノートル=ダム・コレジアル教会となる。アルノー・ドゥ・ヴィアは 1336 年にこのコレジアルに葬られている（大革命後、コレジアルはヴィルヌーヴの教区教会となった）。また枢機卿エティエンヌ・オベール（Étienne Aubert／後の教皇インノケンティウス 6 世）が建てた館は、1356 年に「祝福の谷のシャルトルーズ修道院」（Chartreuse du Val-de-Bénédiction）となる。

15 世紀に入るとサン=タンドレ修道院の衰退が始まる。本院・分院における修道士の減少、修道生活の緩み、コレジアル参事会やシャルトルーズ修道院とのライバル関係なども表面化するようになった。16 世紀後半には修道院長と修道士の対立が起こり、修道院長セザール・ブランカ（César Brancas）が辞職するという混乱も起こっている。同時に修道院の建物なども傷みと荒廃が進行したようで、1603 年には修道院の敷地内にあったサン=マルタン教会のヴォールトが崩落している。そのような混乱状態を収めるために、サン=タンドレ修道院は 1637 年にサン=モール会（Congrégation de Saint-Maur）の管理下に置かれた。サン=モール会は建築家ピエール・ミニャール（Pierre Mignard／ルイ 14 世の王室画家で同名のピエール・ミニャールの甥。アルルのモン・マジュール修道院の改築も手がけている）の主導によって、修道院の建物の改修・改築を進めた。しかし 18 世紀に入ってもその衰退は止まず、1790 年頃には修道士の数は 11 人にまで減っていたという。1789 年の大革命の際には、修道院の建物も被害を受け、サン=マルタンとサン=タンドレの 2 つの教会は破壊された。1792 年、サン=タンドレ修道院は解散となり（9 月 3 日）、サン=タンドレ要塞の軍事的役割も終わった。修道院は軍の病院

となるが、その後は国有財産として売却され、石切り場と化してしまった。

1913 年、画家のルイ=ジョゼフ・イペルマン（Louis-Joseph Yperman／アヴィニヨン教皇宮殿のフレスコ画修復で知られる）が修道院を購入したが、その後 1916 年にはギュスターヴ・ファイエ（Gustave Fayet）の手に渡り、修復工事が進められた。1950 年代になってその孫のロズリン・バクー（Roseline Bacou）が修復工事を継続し、建物と庭園を整え、1990 年から一般公開されている。彼女は 2013 年 2 月に亡くなるが、サン=タンドレ修道院は現在もその家族が引き続き所有し、見学者などを受け入れている。きれいに整備されたテラスからは、アヴィニヨンの向こうにリュベロン山、アルピーユ山地、さらにヴァントゥー山まで見渡せるパノラマが広がっている。

サン=タンドレ修道院の入口は、サン=タンドレ要塞南側の巨大な円塔が 2 つ並ぶ城門から入ってすぐ右側にある。その建物は革命後にサン=モール会のもとで改築された主館（palais abbatial）で、その南側ファサードには、半円アーチのペディメントが架かる古典様式の見事な扉口が付けられている。主館の北側はかつての方形のクロワトル（回廊）で、さらにそのすぐ北側がサン=マルタン教会の遺構である（主館の東側から石段を登るとアクセスできる）。建設は 1024 年で、それまでそこにあった古い礼拝堂を建て替えたものある。単身廊形式で東端に半円形の内陣と後陣が続いていた。身廊は南にあるクロワトルの一辺とほぼ同じ長さとなっている。その内部は側壁にピラストル（方形の付け柱）などが残されていないために判然としないが、2 ベイあるいは 3 ベイからなっていたと思われる。1118 年に墓地を隔ててサン=マルタンの北にサン=タンドレ教会［30.2.24b］が建設され、2 つの教会は内陣部の間に通路を設けることで接続された。さらにその通路の東側には、小さなノートル=ダム礼拝堂（Chapelle Notre-Dame）が作られた。サン=マルタン教会は、先にも触れたように 1603 年にヴォールトが崩落したが、1697 年から再建工事が行われている。しかしそのおよそ 100 年後、大革命が起こった後、サン=タンドレとサン=マルタンの 2 つの教会は共に破壊されてしまい、今では遺構だけが残っている。同じ遺構でも、サン=マルタンの方は、壁面に囲まれた身廊部の長方形の空間が残るだけで、ロマネスク期の聖堂の面影は残念ながらあまり感じられない。

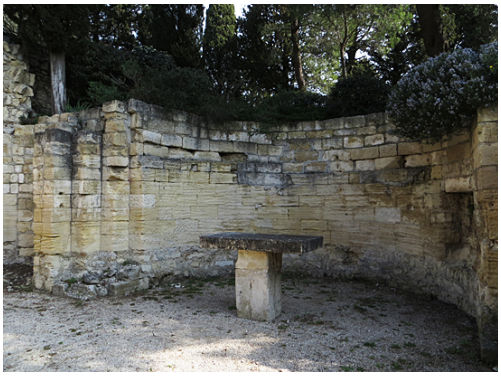
Bibliographie：
Bacou (1963) pp.195-201; Barbut (2010) pp.12-19; Bayol (1898) pp.309-322; Clément (1993) pp.88-91; Labande（1910）pp.131-138; Lacombe（1990）tome 1, pp.38-58; Moreau（1997）pp.256-257; Méritan（1898）pp.273-291; Pérouse de Montclos（1996）pp.565-570; Sautel（1936）pp.111-117; Sournia et Vayssettes（2001）pp.1-25; GV; RIP.

30.2.24b　ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨン／サン=タンドレ修道院付属サン=タンドレ教会（Église Saint-André, Abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon）遺構

サン=タンドレ修道院のサン=マルタン教会遺構［30.2.23a］から小さな墓地（初期キリスト教時代のものと思われる古い石棺が並べられている）を隔ててその北側に、サン=マルタンと並ぶようにしてサン=タンドレ教会の遺構が残っている。建設は 1118 年で、教皇ゲラシウス 2 世

臨席の下で献堂式が行われたとされる。大革命の際にサン=マルタンとともに破壊された。遺構としては、残された身廊や後陣の壁などが破壊される前の様子を比較的良く今に伝えるものとなっている。身廊は 2 ベイからなり、小さなトランセプトと半円形の後陣がそれに続く。身廊の西にはさらに 1320 年頃に増築された南北幅の少し狭いベイが 2 つ続くが、その部分は土に埋もれたままでまだ発掘されていない。身廊の壁面は切り整えられてきっちりと積まれた石積みが、特に北側の壁面の下半分に残されている。またベイを区切るピアもトランセプト北側のものに建設当時の様子がよく残されている。主後陣は大きめの半円形で、残された壁面には窓などの開口部は見られない。中央には石の祭壇が置かれている。北側のトランセプトには半円形の小後陣が付けられている。その小後陣にも開口部は見られない。19 世紀後半に行われた発掘調査の際にクリプト（地下礼拝室）の存在が認められているが、現在は埋められていて確認できない。

ところでなぜサン=タンドレ修道院は、付属聖堂としてサン=マルタンとサン=タンドレの 2 つの教会を、しかも墓地をはさんで南北に並べるようにして建設したのであろうか（2 つの教会の間はおよそ 6 メートルほどである）。1024 年に先に建設されていたサン=マルタン教会よりも、後から建てられたこのサン=タンドレ教会の方が、1118 年の時点では規模が小さいものである。なぜわざわざ小さな聖堂をさらに増築する必要があったのであろうか。P. A. Clément は、サン=マルタンが敬虔な俗人信徒に割り当てられたのに対して、サン=タンドレの方はもっぱら修道士たちが使用したものであったのではないかとしている。つまりより広いサン=マルタンの方をそうした用途に充てることは、修道院の収入という点でも有益であったのかも知れない。



30.2.24b　Église Saint-André

Bibliographie：
Bacou（1963）pp.197–198; Barbut（2010）pp.12–19; Clément（1993）pp.88–91; Pérouse de Montclos（1996）pp.566–568; GV; RIP.

30.2.24c　ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨン／サント=カザリー礼拝堂 (Chapelle Sainte-Cazarie, Fort Saint-André, Villeneuve-lès-Avignon)

サン=タンドレ要塞内にあるサン=タンドレ修道院の敷地内にある。修道院の主館から北へおよそ 80 メートルのところの小さな岩の塊の上に建つ小さくてシンプルな礼拝堂である。アンダオンと呼ばれる小山の上のこの岩場の洞窟で 6 世紀に隠修生活を送ったカザリー（またはカザリア）は、もとは西ゴートの王族の娘であったとも言われる。彼女は 586 年（または 587 年）の 12 月 8 日に亡くなり、彼女の夫で後にアヴィニヨン司教にもなるヴァレウス（Valeus／Valens）が彼女を隠修の場であった洞窟に葬り、その事蹟を伝える石の碑銘を作成した。二人

の結婚の絆は、あくまでも禁欲を旨とする清らかなものであったとされるが、二人には子供がいたのではないかという説もある。いずれにせよカザリーの墓は、その後崇敬の対象となり巡礼なども訪れるようになった。10 世紀になると、やはり彼女を崇敬するベネディクト派の修道士たちがここに共同体を作り、980 年にはそれがサン=タンドレ修道院創建の礎となる。

30.2.24c　Sainte-Cazarie

10 世紀頃にはこの岩場に小礼拝堂（Saint-Nicolas）が建てられていたが、11 世紀末-12 世紀初め頃に彼女に捧げられた礼拝堂が洞窟の上に建てられた。またカザリーは 11 世紀になって聖女とされ、その聖遺物は 1118 年にサン=タンドレ修道院に新たに建設されたサン=タンドレ教会［30.2.24b］の祭壇の下に収められた。14 世紀になって、聖女カザリーの上半身を再現した胸像型の聖遺物入れが作られ、サン=タンドレ修道院に長い間保管されていたが、1789 年の大革命によって失われた。1887 年に金メッキされた金属製の新しいものが製作されてヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのコレジアル教会に置かれた。しかし残念なことに盗難にあって再び失われてしまった。聖女カザリーの 6 世紀の碑銘も同様に大革命によって破損し、いったんは行方不明となるが、こちらは 19 世紀になって発見・修復されて、今はやはりコレジアル教会の聖カザリー礼拝堂（南側の東から 2 番目の祭室）に保存されている。聖女カザリーへの崇敬は大革命をへても絶えることはなく、今でも毎年ペンテコステ（聖霊降臨祭）の月曜に、サン=タンドレ要塞内のサント=カザリー礼拝堂と市内のコレジアル教会でミサが行われている。

このサント=カザリー礼拝堂の建設は、今も述べたように 11 世紀末-12 世紀初め頃とされ、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンでは最も古い建物の 1 つである。不整形の石が積まれた小さな単身廊に半円形の後陣が付けられたシンプルな形である。この後陣には開口部はないが、その上の凱旋アーチの壁には小さな方形の窓が開けられている。岩場の上に建てられていることもあって、特に後陣側の下から見ると、建物は全体的にすらりとした高さを感じさせる。身廊南側の 12 段の石段を登ると扉口となり、長方形の出入口の上に半円形のアーキヴォルトが架かる。その下のタンパン部分は無装飾である。扉口の向かって右上にも小さな半円頭形の窓が開けられている。小さな窓は西壁の上部にも開けられているが、身廊東側の壁面にはなにもない。内部もまたいたってシンプルで、身廊の天井には半円筒形のトンネル・ヴォールトが、また半円形の後陣の上には半ドームが架かる。

Bibliographie：
Bacou（1963）p.195; Barbut（2010）pp.15-17; Clément（1993）p.891; Girard（2001）pp.183-190; Panarotto（2007）p.60; Pérouse de Montclos（1996）p.565; Sautel（1936）pp.118-119; RIP.

30.2.24d　ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨン／ノートル=ダム=ドゥ=ベルヴェゼ礼拝堂（Chapelle Notre-Dame-de-Belvézet, Fort Saint-André, Villeneuve-lès-Avignon）

しばしば「ノートル=ダム=ドゥ=ベルヴゼ」（Notre-Dame-de-Belvezet）と表記される。サン=タンドレ要塞内部の東側はサン=タンドレ修道院の敷地であるが、西側には 11 世紀頃から修道院に隣接してブール（bourg Saint-André）と呼ばれる集落が形成されていた。1150–1175 年頃に建設されたノートル=ダム=ドゥ=ベルヴェゼ礼拝堂はその西端にあって教区教会としての役割を果たしていたが、14 世紀から新市街（ヴィルヌーヴ）が発展するとその役割も終わり、そこに建設されたサン=ポンス教会が教区教会を引き継いだ（大革命の後はコレジアル教会が教区教会となった）。現在はこのブールも一部の家屋の遺構が残るだけで、14 世紀までの面影を残すのはこの礼拝堂だけである。

方形の身廊に後陣が付くだけの小さくてシンプルな外観（東西 8.6 メートル、南北 4.7 メートル）は、サン=タンドレ修道院敷地内のサント=カザリー礼拝堂［30.2.23c］と似ている。ただしノートル=ダム=ドゥ=ベルヴェゼの後陣は五角形で、5 つの面のそれぞれに 3 重になった非常に装飾的な半円アーチ形のモールディング装飾が付けられ、それがロンバルディア帯のように後陣上部を巡っている。また一番上にはモディヨンが並んでいる。後陣の上の凱旋アーチの壁には方形で縦長の窓が開けられている。後陣中央の面にもかつては半円頭形の窓が開けられていたが、窓自体は現在は埋められてしまっており、その代わりにギリシア十字形の開口部が開けられている。ただし後陣の半円アーチのアーケードとモディヨン、そしてこのギリシア十字形の開口部などは、1897 年に行われた修復工事の際に作られたものであって、12 世紀のオリジナルではない。後陣・身廊とも壁面はきれいに切り整えられた大きめの石材がきっちりと積まれている。このように建物全体が非常にきれいな状態であるのもまた 1897 年に行われた修復工事によるところが大きい。その工事の際にはもともと聖堂の上に立っていた小さな鐘楼も撤去されてしまった。なお五角形の後陣の壁面には、石工によって線刻マークの刻みつけられた石がいくつか認められる。

扉口は聖堂南側にある。半円形のモールディングに縁取りされたアーキヴォルトが架かる長方形の出入口である。アーキヴォルトの内側のタンパン部分には、文字列が刻まれている（その意味は判然としない）。扉口の上には左右に 2 ヶ所、半円頭形の窓が開けられているが、これらは外側に向けては隅切りされていない。西ファサードには中央上部に、今度は外側に向けて隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。ただし半円頭形であるのは窓の枠組みのみで、内側の開口部自体は方形である。礼拝堂の北壁に開口部はまったくない。身廊部の上辺には、東西南北すべてに後陣と同じようにモディヨンが並んでいるが、ただしこれもまた 1897 年

30.2.24d　Notre-Dame-de-Belvézet

の工事で付けられたものである。

礼拝堂内部は 2 ベイからなる単身廊で、二重の凱旋アーチ（外側のアーチにはモールディングが付けられている）の東側に後陣が続く。この後陣は外側は五角形であったが、内部は半円形となっている。中央に開けられた半円頭形の窓は内部に向けて隅切りされている。半ドームが架かり、この半ドームと後陣の壁面の一部には、かつての彩色の名残が残されている（後陣の向かって左下の石には« P »の線刻が見られる）。また後陣には半円形のスペース一杯に大きな石の祭壇が置かれ、その表面には聖具などを置いたであろう溝が残されている。身廊の天井は水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かり、2 つのベイの間には横断アーチが架かる。各ベイの側壁には半円形の壁アーチが付けられている。西側のベイには、13 世紀頃のブールの人口増加を反映してであろうか、石造りの二階席（トリビューン）が作られており、そのためこの西側のベイの 1 階部分は背の低い平天井となっている。そのベイの南西角に、2 階席に上るための螺旋階段が付けられている。またこのベイ 1 階の北壁には、キリストの磔刑を描いたフレスコ画の名残が残されている。ただしこの礼拝堂建設当時のものではない。

Bibliographie：

Bardy et al.（1966）p.169; Buholzer（1962）pp.125−126; Labande（1910）p.172; Lacombe（1990）tome 2, plan 8; Méritan（1898）p.320; Sautel（1936）pp.119−122; GV; RIP.

30.2.24e　ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨン／その他の聖堂 (Les autres églises de Villeneuve-lès-Avignon)

ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンには、サン=タンドレ要塞の外にも、市街に多くのキリスト教聖堂がある。必ずしもロマネスク期のものではないが、ここではそのうちのいくつかについて簡単に触れておく。

サン=ポンス教会（Église Saint-Pons）は、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンの市街の南、マルセル・ファブリグール通り（Rue Marcel Fabrigoule）沿いにある。13 世紀の建設で、11 世紀にサン=タンドレ修道院長であった聖ポンス（ポンティウス）に捧げられている。サン=タンドレ要塞内のノートル=ダム=ドゥ=ベルヴェゼ礼拝堂［30.2.23d］の後、ヴィルヌーヴの発展とともに教区教会となった。18 世紀に改築されている。大革命後の 1793 年に国有財産として売却され、倉庫やガレージとして使用されたが、1985 年にヴィルヌーヴのコミューンが買い取り、2000 年代に入って大々的な改修工事が行われた。現在はメディアテークや雇用センターなどの入る 3 階建ての公共施設として活用されている。切妻形の大きな西ファサードには三角形のペディメントを持つ 19 世紀の扉口と、その上に大きな丸窓がある（ただし埋められている）。また身廊の上部（3 階部分）には分厚い扶壁が並んでいる。身廊の東側には方形の塔と五角形の後陣が続き、後陣の中央には縦長で大きな半円頭形の窓が開く。

ノートル=ダム・コレジアル教会（Collégial Notre-Dame）は、やはりヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンの市街の南、サン=マルク広場（Place Saint-Marc）とメソニエ広場（Place

Meissonier）が連なる場所の角にある。サン=ポンス教会とは約 50 メートルの距離である。アヴィニヨンの教皇ヨハネス 22 世の甥で枢機卿でもあったアルノー・ドゥ・ヴィア（Arnaud de Via）が、ヴィルヌーヴにあった自らの所領にコレジアル教会を建設し、そこに 12 人からなる聖堂参事会を創設した。献堂式は教皇ヨハネス 22 世によって 1333 年に行われた。アルノー・ドゥ・ヴィアは 1335 年に亡くなり、その翌年にこのコレジアルに埋葬されている。その後クロワトル（中庭回廊）や大きな鐘塔がゴシック様式で増築された。大革命の後、ヴィルヌーヴの教区教会となる。内部は 6 ベイからなる単身廊形式で、各ベイの天井は 4 分交差リブ・ヴォールトとなっている。身廊の南北両側には礼拝室がずらりと並び、そのうち北側の西から 2 つ目の礼拝室には 19 世紀まで創建者アルノー・ドゥ・ヴィア枢機卿の見事な墓のモニュメントが残されていたが残念ながら現存せず、今そこには彼の横臥像だけが残されている。また南側の東から 2 番目の礼拝室には聖女カザリーの事蹟を刻んだ 6 世紀のものと言われる碑銘版が飾られている。

祝福の谷のシャルトルーズ修道院（Chartreuse du Val de Bénédiction）は、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンの市街地にあって、サン=タンドレ要塞のすぐ西に位置する。リムーザンの貴族の家系出身でアヴィニヨンの枢機卿であったエティエンヌ・オベール（Étienne Aubert）はヴィルヌーヴに館を所有していたが、1352 年にインノケンティウス（イノサン／Innocent）6 世の名で教皇になると、1356 年にその館にシャルトルーズ（カルトジオ会）修道院を創建した。館にはクロワトルや聖堂、修道士の個室棟などが次々に増築され、16–17 世紀にはフランスで最も豊かなシャルトルーズ修道院として繁栄した。1660 年に国王ルイ 14 世が多くの行列を従えて壮麗な記念門（1649 年完成）をくぐってこのシャルトルーズ修道院を訪れたことが、その繁栄を象徴するとも言える出来事であった。大革命の際には多くの部分が破壊され、1793 年に国有財産として売却された。その後 19–20 世紀に修復工事が進められ、現在は一般公開されるとともに、文化センターとしての役割も果たしている。

広い敷地の南東角に 1358 年に献堂されたサント=マリー教会がある。身廊は 4 ベイからなり、その天井は 4 分交差リブ・ヴォールトである。一番東の後陣部分のヴォールトが崩落して失われており、そこから青い空とともにすぐ目の前にサン=タンドレ要塞の姿を見ることができる。このサント=マリー教会の東南端の「三位一体の礼拝室」には教皇インノケンティウス 6 世の墓が残されている。ヴォークリューズのペルヌから運ばれた大理石でできており、アーケード彫刻が施された台座の上に教皇の横臥像が横たわり、その上にフランボワイアン・ゴシック様式の背の高い天蓋と小塔（復元）がそびえ立つという見事なものである。この礼拝室にかつて飾られていたアンゲラン・カルトン作の「聖母の戴冠」（Le Couronnement de la Vierge, 1453）は、今はヴィルヌーヴ市立ピエール

30.2.24e　Chartreuse du Val de Bénédiction

=ドゥ=リュクサンブール博物館に展示されている。サント=マリー教会から小クロワトルをへてその北側には修道士たちの 13 の個室が並ぶ大きな「墓地のクロワトル」（Cloître du Cimetière／南北約 80 メートル、東西約 20 メートル）があり、その 2 つのクロワトルのすぐ西には、「大食堂」（Grand tinel）と「洗礼者ヨハネの礼拝堂」（Chapelle Saint-Jean-Baptiste）がある。この礼拝堂には、アヴィニヨン教皇庁のフレスコ画を描いたことでも知られるマッテオ・ジョヴァネッティ（Matteo Giovanetti）による 14 世紀中頃のフレスコ画が残されている（部分的に剥落）。洗礼者ヨハネの生涯やキリストの磔刑、そして聖母子を礼拝する教皇インノケンティウス 6 世などが描かれている（そのすぐ右隣にも巻物を広げる教皇の立ち姿が描かれているのが見える）。この礼拝堂の西にある大きなサン=ジャンの大クロワトルは教皇になる前の枢機卿エティエンヌ・オベールの館であった部分である。この館は 1365 年に火災に遭い、その跡にクロワトルとそれを取り囲む修道士の独居房が作られた。クロワトルは現存しないが、中庭の中央には 18 世紀後半に作られた大きな円蓋を持つ八角形の井戸（Fontaine Saint-Jean）が残されている。

ノートル=ダム=デ=セット=ドゥルール礼拝堂（Chapelle Notre-Dame-des-7-douleurs）へは、ヴィルヌーヴの街の中央を縦断する県道 D177 をシャルトルーズの入口からさらに北へ 170 メートルほど進む。そこにある大きなロータリーから北西に延びるピエール・スマール通り（Rue Pierre Semard／Sémard）を約 130 メートルほど進むと道路の右側に建っている。« Notre-Dame-des-7-douleurs » とはいわゆる「7 つの悲しみの聖母」で、聖母マリアの生涯に彼女の身に降りかかった 7 つの苦難を表す。しばしば 7 本の剣（あるいは矢）に突き刺されたマリアの姿で表現される。ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのこの礼拝堂は、その規模や荒い石積みの様子、外側に並ぶ扶壁、その間に開けられた半円頭形の窓などから、特に筆者が最初に訪れた 2014 年には、南ファサードの古典様式の扉口は別として、全体的に非常に古い時代のものであるかのような印象を受けたのであるが、実際はこの道を利用していた石切工たちの信心会によって 17 世紀に建設されたものである。その後の歴史ははっきりしない。18 世紀が終わる頃には荒れ果てて廃墟化したが、19 世紀にヴィルヌーヴのコミューンの手に渡り、2019 年になって大々的な修復工事が行われてきれいに整備された。南北方向に向いた身廊は 2 ベイからなる。南ファサードにはシンプルなセグメンタル・ペディメントが架かった方形の扉口があり、その両側にやはり方形の窓が開いている。北側の壁すなわち後陣側は平面となっていて開口部などは何もない。身廊部の東西両側には分厚い扶壁が並び、その扶壁の間には半円頭形の窓が開けられている。南壁の上には、鐘を吊すベイが東西方向に向いた小さな鐘楼が立っている。聖堂内部の広さは 35 ㎡と小さな規模で、側壁に付けられた水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォー

30.2.24e　Notre-Dame-des-7-douleurs

ルトが架かる。北側の壁に沿って石の祭壇が 1 つ置かれており、東側の壁には小さな半円頭形のニッチが付けられているが、それ以外はほとんど何もない。

Bibliographie：

Amargier et al.（1988）pp. 35–38; Barbut（2010）pp.22–27; Bardy et al.（1966）p.169; Fabrié（2000）pp.455–465; Girard（2000）pp.476–476; Pérouse de Montclos（1996）p.570; Robin（1999）pp.215–240; Sournia et Vayssettes（2001）pp.26–63; GV; RIP.

30.2.25　レ・ザングル／サント=マリー教会（Église Sainte-Marie, Les Angles）遺構

レ・ザングルは、ローヌ川をはさんでアヴィニヨンの対岸にあり、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのすぐ南に隣接するコミューンである。コミューン域自体は広いが、最も古い村の中心はその北東寄りの小山の上にある。アヴィニヨンから国道 N100 でローヌ川を渡って西へ 1.4 キロほど進み、「ミディ通り」（Boulevard du Midi）という細い登り道に入る。それを約 600 メートル行くと右手に 19 世紀の洗濯場（lavoir）が現れるので、その手前のやはり細い登り道を右に曲がってすぐに、その洗濯場の北側に回り込むような小道に入ると旧サント=マリー教会の遺構に至る（洗濯場からフレデリック・ミストラル通りをそのまま登ると、現在の村の中心とそこに建つ聖母被昇天教会に至る）。旧サント=マリー教会の遺構がある場所は、現在は森となっている私有地の敷地内にあって、通常はアクセスできない。

この場所には 4 世紀末以降レ・ザングルの古い集落があり、最初の聖堂である« Sancta-Maria-de-Angulis »が建設されたのは 6–7 世紀頃のこととされる。この聖堂はその後、11 世紀に今のヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンにあるサン=タンドレ修道院［30.2.23a–b］の所有する小修道院となり、12 世紀にかけて部分的に改築・拡張された。しかし集落は 14 世紀以降に小修道院とともに放棄され、小山の上の現在の場所に移った。

聖堂の平面プランはいわゆるラテン十字形で、東西の長さはおよそ 19 メートル弱、南北が 14 メートルあまりで、単身廊の東にトランセプトが続き、さらにその東に主後陣とその左右に小後陣が並んでいた。最も古い部分である主後陣は、外側は珍しいことに六角形（内側は半円形）である。小後陣は内外両側とも半円形である。身廊部に横断アーチなどはなかったようである。遺構としては、トランセプトと後陣（北側の小後陣）の土台の一部が残されている。トランセプトのピア（束ね柱）は、切り整えられた比較的大きな方形の石がきっちりと積まれていて、12 世紀の盛期ロマネスク建築の特徴をよく表している。建築的には、ここから直線距離にして約 5 キロしか離れていないヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ教会［30.2.23b］との類似が指摘されている。なお聖堂の内部および外側からはいくつもの墓地が発掘されており、そのうち最も古いものは古代末期にまでさかのぼるものである。

Bibliographie：

Barruol et al.（2001）p.404, p.409; Carru（2001）pp.329–332.

略記号と参考文献

（各聖堂のビブリオグラフィーでは、文献などは和書、欧文文献、Web-site の順に、また GV と RIP は最後に記した）

AM : *Annales du Midi.* Toulouse, Éditions Privat.

AMM : *Archéologie du Midi médiéval.* Carcassonne, Le Centre d'Archéologie Médiévale du Languedoc.

BM : *Bulletin Monumental.* Paris, Éditions Picard.

BMR : *Le bulletin municipal de Remoulins.*

CAF : *Congrès archéologique de France.* Paris, Société Française d'Archéologie.

CAG : *Carte Archéologique de la Gaul.*

CSAF : *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Francais.*

GV : Guide de Visite.

ML : *Midi Libre.*

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

Amargier, Paul, et al.（1988）: *Chartreuses de Provence*, Aix-en-Provence, Édisud.

Bacou, Roseline（1963）: « L'abbaye Saint-André à Villeneuve-lès-Avignon », in *CAF (121e session, 1963, Avignon et Comtat-Venaissin)*, Paris, Société Française d'Archéologie, pp.197-201.

Barbut, Frédérique (2010) : *La route des abbayes en Languedoc-Roussillon*, Rennes, Éditions Ouest-France.

Bardy, Benjamin et al.（1966）: *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes-Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.

Barruol, Guy et al., dir.（2001）: *L'abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon : histoire, archéologie, rayonnement*, Mane, Les Alpes de Limière.

Bayol, M.（1898）: « Notes archéologiques et topographiques sur le fort de Saint-André », in *Mémoires de l'Académie de Vaucluse*, 1898, tome 17, pp. 309-322.

Breton, René (2001) : « Le prieuré Saint-Agricol d'Albaret (Roquemaure, Gard) », in Barruol et al.,dir.（2001）pp.333-336.

Buholzer, Jean-François（1962）: « Notes sur quelques églises romanes du Gard », in *AM*, tome 74, no.58, pp.121-137.

Carraz, Damien et Aspord-Mercier, Sophie（2010）: « Le programme architectural d'un pôle seigneurial : la commanderie de Montfrin（Gard）», in *AMM*, tome 28, pp.297-315.

Carru, Dominique（2001）: « Église Sainte-Marie des Angles (Gard), notice archéologique », in Barruol et al.,dir.（2001）pp.329-332.

Chantal, Maigret（2003）: « Le château oublié de Roquemaure（Gard）XIe-XIXe siècle »,

in *AMM*, tome 21, pp.115–139.

Chupin, Claudie et al.（2008）: « Gard. Remoulins. La cheminée de la salle haute du « donjon » », in *BM,* tome 166, no.3, pp. 259–263.

Clément, Pierre A.（1993）: *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.

————————（2001）: « Les possessions de l'abbaye sur la rive droit du Rhône », in Barruol et al.,dir.（2001）pp.235–242.

Cottle, Basil（2002）: *All the Cathedrals of France*, London, Unicorn Press.

Droste, Thorsten（1990）: *La France romane*, Paris, Les Éditions Arthaud.

Durand-Sendrail, Geneviève（1995）: « L'architecture grandmontaine dans le Midi languedocien entre 1150 et 1250 », in *AM*, tome 107, no.209, pp.5–34.

Duval, Noël, dir.（1995）: *Les premiers monuments chrétiens de la France*. tome 1. Sud-Est et Corse, Paris, Picard.

Eydoux, Henri-Paul（1978）: *Monuments méconnus, Provence*, Paris, Librairie Académique Perrin.

Fabrié, Marie-Luce（2000）: « La collégiale Notre-Dame de Villeneuve-lès-Avignon », in *CAF（157e session, 1999, Gard）* pp.455–465.

Germer-Durand, Eugène（1864）: *Le prieuré et le pont de Saint-Nicolas de Campagnac : fragment d'histoire locale*, Nîmes, Imprimerie Clavel–Ballivet.

————————（1868）: *Dictionnaire topographique du département du Gard*, Paris.

Girard, Alain（2000）: « La chartreuse du Val de Bénédiction », in *CAF（157e session, 1999, Gard）*, pp.467–476.

————————（2001）: « Sainte Casarie entre réalité et légende », in Barruol et al.,dir.（2001）pp.183–190.

Goiffon, Etienne（1881）: *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.

Granièrer, Sylvain et Granier, Jacky（1982）: « Le site de Fours à Sauveterre（Gard）et sa fabrique d'amphores », in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 15, pp.373–379.

Labande, Léon-Honoré（1910）: « Monastère et fort Saint-André. Chapelle Notre-Dame-de-Belvézet », in *CAF（76e session, 1909, Avignon）*, pp.131–138.

Lacombe, Noël（1990）: *Villeneuve-lès-Avignon : Notes historiques*, 2 tomes, Mairie de Villeneuve-lès-Avignon.

Lassalle, Victor（1970）: *L'influence antique dans l'art roman provençal*, Paris, Éditions E. de Boccard.

Moreau, Marthe（1997）: *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.

Méritan, M.（1898）：« Étude sur les abbés et le Monastère de St-André de Villeneuve-les-Avignon（1）», in *Mémoires de l'Académie de Vaucluse*, tome 17, pp.273–308.

Morel, Jacques（2007）：*Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.

Mougneau, Micheline（1991）：*Montfrin : un village du Midi au carrefour de l'histoire*, Nîmes, Lacour.

Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert（1975）：*Languedoc roman: le Languedoc méditerranéen,* Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.

Paillet, Jean-Louis（1986）：« L'utilisation des concrétions de l'aqueduc de Nîmes en tant que matériau de construction », in *Méditerranée*, tome 57, pp.152–160.

Panarotto, Serge（2007）：*Chapelles de Provence*, Aix-en-Provence, Édisud.

Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir.（1996）：*Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.

Pesenti, Claire（2008）：« Pujaut（Gard）. Saint-Vérédème », in *AM*, no.38, pp.222–223.

Provost, Michel et al.（1999）：*Carte Archéologique de la Gaul, 30, tome 2, Le Gard*, Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres（*CAG*）.

Robin, Françoise（1999）：*Midi Gothique de Béziers à Avignon*, Paris, Picard.

Sallustien–Joseph（1899）：« Quelques églises romanes du Gard » in *CAF（64e session, 1897, Nîmes）*, pp.305–318.

Sautel, Joseph（1936）：*Les chapelles de campagne de l'archidiocèse d'Avignon et de ses anciens diocèses, Avignon et Lyon,* fascicule 2. Avignon, Imprimerie Rullière.

Sournia, Bernard et Vayssettes, Jean-Louis（2001）：*Villeneuve-lès-Avignon, Le fort Saint-André et la chartreuse du Val-de-Bénédiction*, Paris, Édition du patrimoine.

Trenquier, Eugène（1847）：*Mémoires pour servir à l'histoire de la ville de Montfrin*. réédition, Nîmes, Lacour, 1989.

Trenquier, Eugène（1851）：*Remoulins et ses environs*, réédition, Paris, Éditions Res Universis, 1989.

Valla, Abbé Louis（1900）：*Aramon, temps anciens–administration–temps modernes*, Montpellier, Imprimerie de la manufacture de la charité.

Web-site

Base Mérimée.
http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/　（2022.2.1 アクセス）

Midi Libre：Actualités Saint-Hippolyte-de-Montaigu, 2010.11.3.
http://histoireetcivilisationdeluzege.blogs.midilibre.com/　（2020.10.15 アクセス）

Nîmes Métropole（Sernhac）.
https://www.nimes-metropole.fr/lagglo/les-communes-de-lagglo/sernhac.html
（2022.5.20 アクセス）
Site officiel de la commune de La Capelle-et-Masmolène.
http://www.lacapelle-masmolene.fr/　（2021.11.20 アクセス）
Site officiel de la commune de Montfrin.
https://montfrin.fr/　（2022.5.1 アクセス）
Site officiel de la commune de Théziers.
http://www.mairie-theziers.fr/　（2022.4.1 アクセス）